

蓼食う虫と好き好き達

外道男

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは府熊市

個性的な者共の多く集う地

これは変な人たちの繰り広げる物語

奇人・変人・常識人は何を成すか

日常系 都市浪漫奇譚

目次

好事家どもの集う土地

正義の味方？

淀む瞳の教員

淀む瞳の教員

淀む瞳の教員

淀む瞳の教員

—

1

2

3

4

1

25

49

81

105

好事家どもの集う土地

正義の味方？

●
鏡の前に立ち、私は身だしなみを整える

髭は左右に切り揃えている。生まれながらに立ち癖のある頭髮は、誰が見ても怒髪天と称する程に空を衝いている。・・・おっと、埃が着いていた。

特注のスーツの紺色に真っ赤なネクタイが映える。

これで完璧。準備を終えて玄関に立つ。

出る前に息子、真事に一声掛けておく。

「それでは、行ってくる」

「あ、親父、晩飯スパゲティにする予定だけど、味何が良い？」

ふむ、スパゲティか。

「・・・ミートソースで頼む」

まあ、真事の作る料理はどんな味でも旨いが。声に出さぬ笑みを作る。

高木は数秒痛みに悶えた後立ち直った。

「つと、そういえば、こないだ良い店見つけたんすよ。今晚とかにいかないっすか？」
と言い、高木が手で酌の形を作る。少々考え、しかし

「・・・だめだ。今晚は息子と食べるのでな」

家に帰れば真事とスパゲティが待っている。当然、食べたいのである。

長い間、二人で暮らし、家の事も任せていたことで真事の実家庭スキルは大幅に上昇している。特に料理の腕は飛び抜けて上達し、今なら何を作っても

私の胃袋を掴んで離さない。

だめだったかー、といつの間にか周囲に来ていた私の課のメンバーが落胆の声を出す。

「まさかお前達、私一人に奢ってもらおうだなんて思っちゃあいねえだろうな」

「・・・」

皆が口を真横に結ぶ。

まさかの凶星かよ。流石に分かり易過ぎやしないだろうか。

ばれたか、と小さく口にした高木にはデコピンをプレゼントしてやった。

「息子さんって言う・・・真事君ですっけ。良い子っすよねえ」

と高木。うむ、そうであろうそうであろう。

「こないだスーパーで見かけましたよ。卵特売セールで血眼になってましたね。」

おぼちやん達に吹き飛ばされてましたけど・・・」

と伊藤。むう、セール時の御婦人方は歴戦の強者に劣らぬ。真事には荷が重かったか。

「歩道橋でおぼあさん背負ってましたよ。困っている人を放って置けないのは

課長譲りですかね」

と和田。流石だ真事。私は感激している。

「うむ、教育の賜であるな。私の若い頃に瓜二つであるわ」

「.....」

何故か全員黙ってしまった。ややあつて、

「それは無いっすよ」

と、手を顔の前で振る高木。他の奴等も苦笑いを浮かべている。解せぬ。

とりあえず高木にデコピンを叩き込んでおくとする。



ドアノブを捻り屋上に入る。金網のフェンス近く設置されたベンチに座り一息吐く。

晴天の下、燦燦と降り注ぐ日光は植木鉢の花々にかかっている。花は伊藤が心の癒しにと置いていったものだ。現在では屋上中央は小さなガーデンへと変貌している。

晴れの日は、こうして屋上で寛ぐのが至福の時間だ。

ここから屋上の花々や街の景色を眺めれば私の心も和むというものだ。

・・・あつ、誰だ煙草の吸い殻ポイ捨てしやがった野郎は。

「まったく、マナーがなってねえな。」

吸い殻を灰皿に突っ込んだ時であった。

WARNING! WARNING! BOOOOM! BOOOOM!

私の「正義センサー」が何か問題事の発生を捉えた。

——何事だ? 如何なる問題が発生した!?

「センサー」が反応する時は、決まって人が助けを求めた時か、悪事を働いた者がいる時だ。

急ぎ感覚を研ぎ澄まし、街で何が起こっているかを把握する。

——銀行強盗・・・だど・・・!

よくもまあ平穏を脅かす者共が現れるものだ。自然とこめかみに青筋が立つ。

——落ち着け、冷静になれ私。

ともあれ、見過ごす事は出来んな。準備運動をしておくでしょう。

「あの、高木さん、課長は何処に居るか分かりますか」

「課長ですか、多分屋上でまったりしてんじやないっすかね」

「ありがとうございます」

鈴木進は課のリーダー、まさきよしき正生善鬼を探していた。

役所で働き始めて2年目の、まだ経験の浅い鈴木は分からないことを課長に質問したかった。

『おう鈴木、いいか、分からん事があつたら私を頼れ。あんまり些細な事で頼つて来るなよ、そんときやデコピンだ。』

初対面の時、長身で強面の正生に竦み上がっていた彼に正生が掛けた言葉である。話してみると、非常に気さくで面倒見がよく、周囲の人望も厚い人だとわかった。

屋上に出た鈴木が見たのは紺色のスーツの後姿であった。

金網のフェンスより頭一つ分高い巨躯、後ろから見ても目立っている逆立ったクセつ毛、

間違いなく正生である。そうして話し掛けようとして、

「あ、課ちよ」

「ぬうるあああああ!!」

「・・・え？」

何だ今のは。若干の煙が立った屋上で鈴木がそう思考したのも当然と言えるだろう。

彼は自身の目を疑った。

目の前にいた課長が強烈なシャウトと共に跳んだ、否、飛んだのだ。

それは鳥の飛翔のように見事な軌跡を引いた。

しばらく呆然として澄んだ空を鈴木は眺めていた。

そして絶叫した。



「む、誰か居たのか」

今しがた誰かに話し掛けられた気もするが構うまい。

風圧で髪がはたためく。早くマスクを着用せねば。

・・・しかしこのマスク、自作の品ながらなんとも無骨。

やや触角にも似た頭部の突起などが昔観ていた『マスクド飛蝗』を想起させる。

「3 km 先、車で移動中か。まだ、警察は気付いてないようだなあ。」

・ ・ ・ 堂々と正面から行くか。」

マスク装着完了。目標まで残り5カウント。

5 . . . 4 . . . 3 . . . 2 . . . 1 . . . 0 .

「ぬううるああああ!!」

突入!!!

●
作戦は完璧のはずであった。

始まりは友人の傍迷惑な一言であった。

— そうだ、銀行強盗をしよう—

日常生活で口に出せば嘲りと笑いに流されるようなくだらぬ戯言であっただろう。

しかし、俺を含めその夜に集まったメンバーは、深夜の変に勢いのついたテンションか、

酒を飲み交わし心地良く舌も回りだした反動か、はたまた其の両方かは定かではない

が、

口火を切った友人をはじめ俺達は銀行強盗という言葉の響きにさながら玩具を与えられた子どものように目を輝かせたのだ。

暇を持て余していた俺達は一度火が点いただけで完全にその気になった。

銀行強盗をするからには当然リターン、大金を確実に手に入れなければならない。

そこで強盗の作戦参謀には俺が指名された。

妥当な判断だろう。いつものメンバーでつるむ時は俺が頭脳役であったし、

俺は他のメンバーに比べて身体能力はからきしだった。適材適所というヤツだ。

生来の凝り性であった俺は下準備を徹底した。

日取り、逃走の足、逃走経路まで調べてメンバーと話し合った。

拳銃を早い段階で入手できたのは嬉しい誤算であった。

念を入れて整備した上で試射もしたので暴発の心配も無いだろう。

そして当日、上手くいった。

目指したのは警察に捉えられない電撃戦。

警察に囲まれて銀行内に籠城など御免だ。

顔は縁日のお面で隠し、先手を打って監視カメラを破壊した。

銀行を出たとき警察が居ないことを確認し内心でガッツポーズを取った。

他のメンバーも緊張していたのだろう、

言い出しつぺのあいつ以外は車に乗り込むと深い息を吐いた。

少々の計算違いは盗み出した金の量だ。欲を言えば多めに欲しかった。

バッグをもっと大きめにしておくべきだったか、おそらく五千万前後だろう。

これでは山分けしても一人当たり一千万程度か。

いや、そもそも悪銭なのだ。

日々に燻っていたろくでなしには過ぎた金と言える。

ともかく、歓喜の声に包まれる車の中で、

人生を賭けた一種のギャンブルに勝利した俺は口の端を僅かに上げる。

その時だった。それは唐突に訪れた。

車の助手席に座る俺は太陽に影が落ちたのを視認する。

鳥かと思ひ凝視していると影は形を大きくし真っ直ぐにこちらに落ちてくる。

この異変には運転していた仲間も気付いた。

しかし、更なる異常が待っていた。

それは鳥と呼ぶにはあまりにも大きく、晴れた空よりも青い紺を纏っていた。

どこかのコミックで見た前傾タックルの構えを取ったそれは、

人であつた。

「ぬうううるあああああ!!」

瞬時、車が横転した。



「ぬん、吾輩が目を光らせるこの街で、

銀行強盗などという悪事を働こうとは笑止千万、一体全体どういう見であるか」

「な、何だ手前は!」

「いいかあ、耳かっぽじってよく聞けえい。

吾輩は、通りすがりの、正義の味方だ!」

デデーン

「………何だつて?」

「……すまん、嘘を吐いた。吾輩は別に通りすがりではない。」

「いや、そこじゃねえよ!」

「ともかく、少しばかり話をしようではないか。

貴様ら、自首する気はないか? 心を入れ替えて、だ。

今ならまだ人生リスタート出来るが、どうする?」

「ふ、ふざけんな!! 此処まで来て諦められるわけ、ねえだろうが!!」

パパン キキン

「な、何で銃が効かねんだよ!」

「ぬうん・・・街の平和を護るヒーローである吾輩に、

たかだか銃弾ゴとき効くわきゃねえだろう!」

「あ、ありえねえだろ!」

「チツチツチツ、正義の味方を舐めてもらっては困る」

「・・・マジであんた何者だよ」

「おっと失敬、忘れる所であった、名乗りがまだであったなあ、良く聞いておれい。

吾輩は、正義の使者、平和の守護神! ガーディアン・ジャスティス!

である。さあ、吾輩が優しい内に自首を」

「う、撃てえ!」

パパパパン

「ぬあ!!・・・聞く耳持たず、か。イイだろう！」

貴様らに、この吾輩直々に、正義・平和・仁義・道德の何たるか!

その身に刻んでくれるわあ!!ぬううるああああ!!」

「うわあああ!」

~~~~~

監視カメラの映像はここで途切れている。

●

現場に到着した警察官が発見したのは、

荒縄で簀巻きにされた銀行強盗犯五人組と横転した車両、

バッグに詰められた現金約五千万円、

そして現場から飛び去る紺色の影であった。

●

「・・・はあ」

昼の休憩時間も終わり間近。

課内で鈴木進は緑茶を啜り息を吐いた。吐息に含まれる感情は困惑のみ。

先刻、自分の上司である正生が叫びながら空へ飛び上がるという鮮烈な光景を目の当たりに

した彼は、誰も居ない屋上でひとしきり驚きの声を上げた後、訳も分からず仕事場に戻って

来たのだ。

「おう? ススム、どした何か悩みか」

そんな彼の様子を気にした同課の和田義治わだよしはるが声を掛ける。

「え!? …ええつとですな…」

「…うん?」

話し掛けられ鈴木は体全体が跳ね上がったような錯覚に陥る。

答えるべきは先程目撃した屋上で的一件だろう。

しかし、此処で鈴木が危惧したのは当然ながら信じてもらえるか否かであった。

課長が空に飛んで行った、

という言を信じる方より世迷言と切り捨てられる方の可能性が高いだろう。

もし、下手に痛い人認定などされようものならメンタル面の弱い鈴木には二度と職場に顔を出せなくなるという確信があった。

だが、見なかった事には出来ないし、なにより嘘も吐きたくない。  
鈴木は隠し事の出来ない男であった。

思考をまとめ直し、髭を撫でつけている和田に向きを正す。  
覚悟は決めた。そして言葉を放つ。

「あのですね、課長が、飛んでったんです、その・・・空を」

●  
自分の発言に鈴木は、課の全員の視線が自分に集中したことを肌で感じた。

——これは、不味い・・・！！

まさか空気が凍りつくとは思っていなかった彼は冷や汗を流す。

鈴木は最悪の未来を想像し思考が停止する。

それを他所に課の全員は示し合わせたかのように視線を交わし、そして、

「あゝ、なるほど」

全員が同じ台詞を発した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

思考停止から立ち直った鈴木は皆の取った反応に啞然とする。

自分の理解を超えた出来事について他の皆が納得している今の状況は、彼を二度目の困惑に誘うには十分だった。

「……いや、そもそもさっきの説明だけでどうして理解できるんだ？」

「あ、あの、どういう事なんですか？」

皆の知る真実を問う。

「そーいやお前さん、こつち来て二月も経ってないか。」

ならアレを知らんのも仕方ないよな」

和田の返答に鈴木は更に疑問を重ねる。

「アレというのは……？」

「私の時も君みたいにあわてたなあ」

「いやあ、自分も初めて見たときはマジにビビったつすよ」

「……ははッ、ヘイジはな、慌て過ぎて階段から転げ落ちてな、

でっけえタンコブこさえてんだ。お前が一番傑作だったぜヘイジ」

「ちよつ、それは蒸し返さない約束つすよ!?今でも恥ずいんすから!」

まるで学生時代の思い出を語り合うかのようにその場の皆は言葉を交わす。

話の流れに思考が追いつかず置いてけぼりにされた鈴木が不意に思い出したのは

奇しくも課長、正生の言葉であつた。

それは彼が現在の課に異動してから直ぐの事。

正生が別件と伝え出て行く事があつたので、

氣になつた鈴木はその訳を本人に尋ねたのだつた。

すると正生は浅く目を細めて鈴木の肩に手を置き言つた。

『ふふ、人助けだ。なあ鈴木、徳のある生き方しろよ。

そうだな、さしづめ・一日一善つてな。ファイト』

今思うとアレも何か関係があつたのだらうか。

鈴木の意味が場を離れている内に思い出話にも区切りがついたのか、

和田が彼に向き直る。

「そうさな、お前さんが見た事を説明するとだな・・」

「は、」

頷いた鈴木に初老の男は答える。

「課長は正義の味方なんだよ。時々、別件で居なかつたら？あれはそういうことだ」

鈴木の思考は再び停止した。

「・・・・・・へ？・・今、正義の味方つて、え?？」

飛び出して来たのはフィクションの中でしか聞き慣れぬような荒唐無稽な言葉で

あった。

しかし、その荒唐無稽な言葉は意外なほど抵抗も無く鈴木的心中にはまった。

先程に思い出した課長の言葉もパズルのピースの如く噛み合っているようにも思う。

更に話は続く。

「ヒーロー、とも言えるか？お前さん、昔に特撮とか見てなかったか。

ほら、あれだ、『マスクド飛蝗』とか『ウルトラ団』とかそんなん」

「ああ、俺の世代はもう昭和飛蝗が終わってたつすねー。あ、それとも鈴木君はアニメ派っすか、

『怒雷門』は今も放送してるし、『奇行戦士ランダム』は面白かったつすね」

「高木君、それ正義の味方関係無い奴じゃない？」

「でだススム、課長はまあ、あんな性格だろう？」

人が困っているのを見過ごせない。なんでか知らんが人が困ってたりすると分かるんだそうだ。

正義の味方ってのは的を射てるだろ」

鈴木はやっと一連の出来事を理解した。

課長が不在だった事も、空を飛んでいった事も、全ては人助けに行っていた、という

訳だ。

理解できても納得する事は難しい。しかし、

・・・課長らしいや。

課の中では最も課長と付き合いの短い鈴木でもそう思ってしまうぐらい

人助けをする正生の姿は違和感が無い。それだけ周囲の人間は正生の人柄を尊敬している。

「いっつも凄い声出しながら飛んでくつすよね」

「市役所の隠し名物だもんね」

——声出してる時点で隠す気ないんじや・・・

そもそも去年見かけなかったのが不思議なくらいである。

アレが役所内で周知の事実である事に鈴木は驚くが、

一人で抱え込んで悩む必要が無かったと分かり安堵の息を零す。

そんな様子を見て和田は小さく笑い

自らの肩を回しながら課の全員に告げる。

「よし、課長もちつとばかり遅れるだろうし、早めに業務再開すつか。

それでいいか、お前等？」

各自が了承の言葉を返した。

P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i

鳴り響いたアラームは午後の業務開始の合図だ。

しかし、この場の全ての人員は数分前から仕事を再開したので既に忙しく動いていた。

アラームから数分が経った後、課長、正生が戻ってきた。

「すまん皆、少々遅れた。トラブル等は起こってねえか？」

「おう、大丈夫だぜ課長」

「ええ！課長が抜けてても大して変わら・・あいたあつす!!」

ふざけて発言しようとした高木にデコピンがぶち込まれ、場を笑いが包む。

仕事の手は停滞させないが、和気藹々とした雰囲気は崩さないのがこの課の日常である。

「あらら？課長、どうしたんすかこれ？スーツが穴ぼこだらけつすけど」

デコピンから復活した高木が発見したのは、正生の紺色のスーツにいくつか開いた穴だ。



正生は紺のスーツを脱ぎ折りたたみながら椅子に座る。

「ぬう、僅かばかり被弾してな、このスーツも駄目にしてしまったか・・・」

さあて皆！今日はそれほどやる事無いのでパパッと仕事終わらせて帰るかあ！」

「はー」

正生の呼び掛けに全員が頷きを作る。

同じく返事をした鈴木は課長の言葉を咀嚼し、

・・・あれ？被弾って何だ？ああ、うん。聞かなくて良いよな、きつと。

直ぐに仕事に思考を切り替えた。知らないほうが良い事もある。

今日一日で随分と成長した鈴木は、そう断じた。

正生はどこかすつきりとしたような顔つきだった。



業務終了後、課の皆に別れを告げ私は帰路についていた。

本日は銀行強盗犯に正義の良さを伝え非常に満足している。

ただ、銃弾は見事にスーツを貫いてしまった、

こうして特注のスーツ百十八号はその生涯を終えた、合掌。

そういえば、鈴木が私の人助けの事を知ったらしい。

飛ぶ瞬間を目撃したそうだ、確かに誰かが話し掛けてきたときに飛んだ記憶がある。別れ際、鈴木は神妙な面持ちで近づいて来たかと思えば、

『あ、あの、おっ応援してます!!』  
と言ってきた。

あいつは少々硬いところがあるが紛れも無い本心から出た言葉だろう。

・・・思い返せば、誰かの後押しを言葉で受けたのは久しぶりだな。

鈴木には感謝せねばなるまい。

と、思考している内に家の前に来ていた。真事は帰っているようだ。

「ただいま」

「おかえりー」

返事は台所から聞こえてきた。

香しい晩ご飯の匂いが漂ってきている。

耐え切れなくなった私はテーブルに直行する。

「My dear child 真事お、父さんは腹が減りました。さあ飯だ飯!

スパゲティはあ、ミートソースはどこだあ?!」

「ストップだ親父、落ち着こうか。先に洗面所で手洗いうがいだろ？」

真事に諫められ席に着こうとするのを中断する。

むう、いかな。我が子の料理を前にして昂ってしまったか。父さん反省。

一旦洗面所で手洗いうがいを済ませリビングに戻る。

テレビが夕方のニュース番組を映している。

《——本日昼頃、市内の銀行に強盗が入っていたことが分かりました。事件が起こったのは——》

「物騒だな」

ニュースを目で追っていた真事はそう言葉を零す。

《——犯行グループは市内を逃走中に事故を起こした所を取り押さえられたとの事です。——》

「・・平和が一番、だね」

続く報道に安堵交じりの声を出す真事に同意する。

「うむ。さ、飯を食おう」

目の前に盛られたスパゲティの芳香に親子揃って顔を緩ませる。

私も真事も良く食べるほうなので量は他所に比べてかなり多い筈だ。

少し粉チーズを振り掛けて準備は整った。顔の前に手を合わす。

全ての食材と平和に、そして我が家のコック真事に感謝を、さて、

「いただきます」

## 淀む瞳の教員 1

窓から青白い光が差し込む。近所の犬は何が気に障るのか番犬よろしく吠え続けている。

隣の民家からは80を過ぎた爺さんの痰が絡んで吐き出される音が聞こえて来る。

午前5時。日々の習慣としては早く、二度寝を決め込むには少々遅い時間だ。

目覚めて直ぐに煙草に火を点ける。銘柄は何年も前から、灰神楽だ。

煙で肺を満たしつつ朝飯の準備をする。と言つても冷蔵庫の中身はコンビニ弁当と水のみだ。

温めもせず机に弁当を広げ、テレビの電源を入れる。

一月前に買い換えたテレビは早くも故障の兆しを見せ始めている。

青みの濃くかかった液晶画面は見ていて気分の良い物ではない。

冷たくパサついた弁当に手をつけながら早朝のニュース報道に意識を向ける。

ニューステロップには『正義の味方？銀行強盗犯退治！』と打たれており、

強盗犯逮捕に貢献した謎の人物について報じられている。

全く興味が無い。この事件が起きたことなどニュースを見る前から知っていた。

なぜなら、俺の住むこの府熊市内で発生した事だからだ。

丁度その時、街で煙草を買っていた俺は、強盗犯を縛り上げ飛んで行く怪しさ満天の巨漢を目撃した。

と言うかあんなでかい声出してたら誰だつて気付く。

興味が無い理由がもう一つ、見慣れているのだ。

この市に住み始めて数年が経つが、あの巨漢を見た回数是一度や二度ではない。

初見では度肝を抜かれたが、何度目かで市の名物なだと分かった。

更にはこの府熊の地、件の巨漢を含めて奇人変人の出現頻度が異常に高い。

この間に街で見かけた珍妙な格好をした中国人がクリニックを開き（医師免許を持っているかも疑わしい）、頭の痛くなるような電波ソングを垂れ流していたのは記憶に新しい。

さっきのニュース報道も他局の物だし、今の時間は地元の局は取りとめも無い事を紹介している。

仮に市内の住民がああニュースを見たとして、ああ、またか、と言う感想だけで済ますだろう。

それが府熊での日常なのだ。

弁当も食べ終わり、やる事も無いのでさっさとアパートを出る事にした。

出掛けの玄関前で外れかけていた床板を派手に踏み抜いた。

・・・ボロアパートめ。



バイクを停める。目前に見えているのは俺の職場「府熊ふくま殿学院でん」だ。

創設は1920年、今年で創立95年の伝統と歴史ある市内最大規模の学校である。

正直どうでもいいが。

校門前には三頭身の丸い頭のブロンズ像が建てられている。

何も知らない人間がこの銅像を見たとしても、この学園の最高権力者の、しかも等身大の像だと予測する事は不可能だろう。絵本に出てきそうさ。

職員室に入り、デスクに荷物を広げると作業を始める。

つい昨日に行った数学の小テスト、その採点だ。

早く正確に丸付けをしていく。が、暫くして一つのプリントで手を止める。

問題を解かず何も書かれていない用紙。唯一、記述されているのは名前のみ。

「……猫見か」

一切ノートタツチのプリントに怒りを覚えるが、その名前を見て納得する自分が居る。

猫見 ねこみ 光姫 みつぎ

姫の字が思い出せなかったのか散々消しゴムで擦った跡があるが、結局はカタカナで落ち着いている。

俺が担任を受け持つ2—Bクラス。

そのクラスで一番の、否、学校一かも知れない超問題児、それが猫見光姫という男だ。常に騒がしく、まるで息をするように問題を起こしまくる。

大抵の騒動の中心にコイツがいるのではないか。その上非常に頭が悪い。

学院に取って大きな悩みの種だ。‘災い招き’などと呼ばれるのも頷ける。

ゴムボールは大いに結構と笑っていたが。

脳裏に猫耳を揺らし天真爛漫な笑みを浮かべたクソガキを描き俺は溜め息を吐いた。

「おや、何かお困りですか、外道先生 そとみち。どうぞ」

そう言い、コーヒー二つを手を近付いてくるのは、角刈りで体格の良い国語教師雲野 うんのだ。

「有難う御座います。……いや、ウチのクラスの猫見の事で」



コーヒーを胃に押し遣り眠気を払い答える。

「ああ、猫見君ですか。確かに・・・手の掛かる子ですからね」

「直球で馬鹿と呼ばれても問題無いですよ先生」

馬鹿と言わないのはこの人の優しさだろう。いやいやと苦笑する大柄な雲野を見上げる。

——近くで見るとでかいよなあ。

俺の身長は平均より上だが、この雲野、俺より更に二回り程大きい。

230cm。世界中を探しても稀なレベルの巨体を有する彼は初見では人に避けられ易い。

しかし、その内面は温厚篤実を体現したような人の良さで、生徒と教師からの信頼は厚い。

先日、学校の生徒が秘密裏に行っていた教員人気投票なるものでは見事に首位の座に輝いた。

・・・俺は下から数えた方が早かった。

「猫見君も丁寧に教えれば、きつと分かってくれますよ」

「・・・無理じゃないですかね」

話題に上がっている問題児は物覚えもよろしくない。だからこそその悩みの種なのだ。

雲野と話している間に新たに二人の教師が職員室に入り、こちらを見るなり近付いて来た。

「外道くーん。おっはよう！」

「ヤツ?! 外道クン、君はいつも顔色が優れないネ? ワシ特製のサプリメントは如何かな!?」

面倒な、否、うつとうしい奴等が来た。思わず顔を顰めたが舌打ちは我慢した。

話し掛けてきたのは金髪と白髪、英語教師と生物教師の二人だ。

「・・・おはよう御座います雪平先生。ジジ、いや木原先生、結構ですから薬をしまつてください」

「もう、挨拶が硬いわよ。気軽にリョウコって呼んでいいのに」

「ヤヤ!?! そうかね? ではコレは雲野クンに贈るとしようネー!」

金髪の英語教師、雪平<sup>ゆきひら</sup>は俺の前で奇妙に身をクネらせている。

こいつは普段から俺に話し掛けてくるわ目の前で奇怪な行動するわで物凄くうつとうしい。

過去に一度シバキ倒したら何故か更に接触してくるようになった変人である。

白髪の生物教師、木原<sup>きはら</sup>は苦笑いする雲野にサプリメントを押し付けている。

目の焦点の合っていない小柄なジジイもとい生物教師は誰にでも自分の作った怪しげ

な薬を処方しようと

するので、生徒、教師問わず恐れられている。

人の良い雲野は薬の押し付けを断れず真面目に服用している。そんな話は生徒の耳にも届き、

木原から薬を受け取ってしまった生徒は、まるで駆け込み寺の如く雲野に薬を持っていくそうだ。

最近、雲野のデスクの引き出しに胃薬が入れられたのを俺は知っている。

「外道君と雲野さんは何を話してたの？」

「猫見君についてですよ」

雪平の質問で再び問題児の話題に戻る。俺としてはもうあのバカの事を考えたく無いんだが。

「ああ、猫見君ね、かわいいいわよね、耳もキュートだし」

「ヤ、あれだけ元気ならワシの薬要らずじゃな！」

この奇人変人共はどこか一般人と評価基準が狂っているが全て間違っている訳では無い。

あのクソガキは確かにバカだが嫌われてはいない。むしろ人を惹き付ける魅力を持っている。

これでバカで無けりや、いや、やめやめ、これ以上アイツの事は考えたく無い。深い溜め息を吐くと俺の顔を見ていた雪平がいきなりにやけ顔になった。

「悩んでいる外道君も素敵！私が慰めてアゲル！」

突然、両手を広げてこちらに迫って来た雪平を地面に叩き伏せる。

こいつと同じ場所に居るのも面倒だ、朝の鐘が鳴る時間なのでそろそろ出るか。「あつ、外道先生、これを忘れてますよ」

職員室から出ようとした俺に雲野がプレートを手渡してくる。

教員に支給されているネームプレートだ。

府熊殿学院

そとみち  
外道 ただのぶ  
忠信

俺の名の印刷されたネームプレートを胸に付けると廊下に出た。

行き先は俺の担当教室2―B。



2―B

自身が担任を務めるクラスに入った外道は静寂を肌で感じた。

浅く空間に漂うのは熱と音の残滓。つい先程まで学生特有の喧騒が場を包んでいた証左である。

2—Bは学院でも有数の活力で満ちたクラスである。しかし、今この場を支配しているのは冷、静寂である。

その原因を作っているのは他ならぬ教員、外道忠信であった。

昨年度の当初、外道は己の数学の授業で私語をした若しくは騒いだ生徒に対し教育的指導で黙らせる凶行に走り、新入生全員を震撼させた。

その後、押しかけて来た生徒の親とどのような話し合いがされたか定かでは無い。しかし、外道は何の処罰も受けず、今も恐怖の授業を続けている。

そういった事から外道には、最大級の畏怖と侮蔑、出洩らし程度の親しみを込めて‘ゲドー’、と言う渾名が与えられている。

外道は特に伝える事項も無いので日直の名を呼びSHRの進行を丸投げした。

校庭側の窓を開け放ち‘灰神楽’に火を灯す。そうして銜え煙草のまま出席簿にチエツクを入れる。

このクラスで遅刻をする者は殆ど居ない。少なくとも新学期に入ってからは遅刻者を見ていない。

その最たる原因もやはり外道にあった。暴力教師は当然遅刻する者にも容赦しない。警告無しで放たれる鉄拳は、2—B生徒の出席率をほぼ100%に引き上げる程に恐怖を振り撒いていた。

クラス内の静寂に心地良く出席を取っていた外道は、はて、と違和感を得た。

——このクラスはこんなに静かだったか？

何か、この静けさには何かが足りていない。

心地良い静寂の筈、しかし、2—Bクラスとして決定的に欠けている。

外道の記憶では昨日の同時刻、このクラスは外道が入って来ててもかなり騒々しい空気だった。

原因は何だったか、と外道はクラスを見回して違和感の正体に気付いた。

——奴が居ない……。

思考と同時に、廊下を駆ける足音が聞こえてきた。

足音は徐々にクラスに近づき、通り過ぎかけた所でブレーキを掛けて止まる。

それは教室の扉を勢い良く開け放った。

「おっはよ〜！」

教室に入って来た少年は快活に挨拶を行う。

艶のある黒髪と、それと同色の猫の耳を揺らし、ニコニコと人好きの笑みを浮かべる

少年に、

少年のクラスメイトは苦笑しながらも挨拶を返す。

外道は先程まで完全に失念していた。

2―Bの騒ぎのほぼ全てに係わる問題児、猫見光姫について。

光姫は己を睨み付ける担任教師に気付く事無く友人に話し掛ける。

「マコちゃん、おっは〜!」

「おいミツ、完璧に遅刻じゃねえか。何やってたんだよ」

「いや〜、怒雷門が面白くつてさ。うん・・・?遅刻・・・?」

光姫は訝しげに壁掛け時計をちらりと見やり、

「・・・うん!大丈夫大丈夫!こう言うの何てえの?えーと、そう!セーフ、ギリセーフ

!」

「残念ながらアウトだ馬鹿が」

不意に浴びせられた濃密な怒気、息の詰まるほどに凍り付いた空気を感じて、

光姫は己の背後で仁王立ちをしている外道に漸く気付いたが、些いさか遅過ぎた。

瞬時、外道は握り込んだ右拳を遅刻生徒の頭上に振り落とした。

ダンボール箱を叩き潰したかの様な鈍い音が教室に響く。

「イッツた〜痛い超痛い!!うおお、ゲドちゃん殴んなよバカになんだろ!」

「やかましい、遅刻する方が悪い」

それにお前はこれ以上馬鹿にならんから安心だな、

と続ける外道に煙で吹かれ、光姫は齒を剥いて怒りを表す。

「あのく先生、煙草は出来れば外の方でお願いします」

「ん？ああ、そうするか」

両者が暫く睨み合っていたところ、外道は生徒の指摘を受けて喫煙室に向かうと決めた。

少し生徒が怯えているのは外道の教育的指導を警戒しているからか。

……そこまで見境無しじゃねえよ。

外道は足早に教室から出て行こうとして、しかし思い直すと反転、

光姫の所まで戻って来ると再び拳骨を叩き込んだ。

空き缶を蹴り飛ばした様な快音が響いた。

コメディさながらに大きなタンコブを作った光姫は唸る。

「ニヤンツ!? 2回目……は身に覚えが無<sup>ね</sup>えぜ、何で僕殴られたの!」

馬鹿はそれだけで罪だと外道は思うが面倒なので口には出さない。

2回目の拳骨の理由は、

「……お前、昨日の小テスト白紙だったぞ、真面目にやれ馬鹿野郎」



「名前は書いてたヒイツごめんごめん」

一睨みで馬鹿を黙らせる。

だいたい自分の名前すら漢字で書けてない奴が何をほざくか。

「いや、でもだよゲドちゃん、分かんなくて書けなかつたぜ？」

「……今教えてる範囲の復習だったんだが……？」

少なくとも普通に授業を受けて一問も解けないような難問を出した積もりは無い。

当然、原因は光姫にある。

外道の教える数学、その間に光姫がやっている事と言えば質問するか寝るかのどちらかだ。

一：授業内容を理解しない光姫は黒板と教科書の双方を見ては首を捻っている。

その様子には外道も光姫の頭上に浮く大量の疑問符を幻視した。

そうして光姫は友人に質問しようとするが、大きく良く通る彼の声音は暴力教師ゲに私語と認定され即刻鎮圧される。

二：ならばと光姫は外道に直接質問をぶつけるが、そもそも外道は授業進行重視のスタイルなので一切の質問を受け付けない。（単純に光姫に取り合うのが面倒、と言うのもあるが）

それでも食い下がろうとしてまた鎮圧される。

三：そして授業について来れなくなつた光姫は、いつしかテキストに顔を埋め、意識も鉛筆も放り出し、

すやすやと寝息を立て始め、言うまでも無く無表情の数学教師直々にTEKKENが振るわれる。

ここまでが数学の授業で必ず起きる流れである。

——コイツには拳しか振るつてない気がするな……。

教師の体罰が罷り通るなんて事は一昔前の話だ。

それでも手が出るのは外道の短気故か、あるいは……。

外道は必死に言い訳を考える光姫を半目で見る。

先日は数学が二限連続だった事もあり、8回は拳がグーで飛んだ。

だが、外道としては己が暴力教師などと恐れられるのは何処か納得しかねる物がある。

——授業はしっかり進めてるし、質問は授業後なら受け付けてる。機嫌が悪いときはつい叩きのめす事もあるが、話し掛けて来る方が悪い。それに最近は隠れて煙草吸おうとしてた不良に教育的指導をした以外は、このバカぐらいだ。まあ、つまり——

全部この馬鹿が悪い、と外道が内で締め括った所で光姫が言葉を放つ。

「うん、つまりゲドちゃんの教え方が悪かつ、ちよつストップ！タンマンマ!!」  
光姫はゆつくりと拳を振り翳した外道を慌てて止める。

必死に考え出された言い訳は、的確に外道の抑えていた怒りを踏み付けた。  
外道から漏れ出したどす黒いオーラに当たり、ひいつ、と周囲が遠ざかる。

「は、はは、すぐに手を出すの止めようぜゲドちゃん。怖いぜ」

「・・・ああ、俺も心が痛むさ。可愛い生徒を殴るのはな」

「こ、この暴力教師・・・！笑いながらそんな事言つたつてちつとも説得力無いよ！さてはアレだな!?僕を笑い物にしてるな!?どうだ、この名推理！」

「当たり前だ馬鹿、それ以外に何がある」

何処が名推理なのか意味不明だが、

それよりも外道は知らぬ間に己の口を笑いで歪めていた事に小さく驚き直ぐにフラットに戻した。

ぐぬうと唸る光姫を無視して話を進める。

「次に馬鹿な事したらどうなるか楽しみだな、おい」

「あつ、また暴力に訴える気だろ！」

ゲドちゃん大人なんだからもう少し手加減してくれても良いと思いません！うん」

殴られるのを警戒してか頭を庇って妙な敬語で喋る光姫に、再び怒りが蓄積していく

外道。

故に、ストレス発散に先ず嗤<sup>わら</sup>う。続けて、

「ふっ、確かに大人気無かったかもな。反省するか・・・」

「あれ？ ホント？ 今日のゲドちゃんやけに素直」

「選択肢くらいは与えるべきだよな」

「・・・へ？」

「自分のペナルティぐらい選びたいよなあ。

だから、大人である俺はお前に選ばせてやるよ」

1. 根性焼き

2. 鼻を折る

3. 猫耳を千切る

「さあ選べ。3 択だ」

光姫は青褪めた。

「にやあーり、リアルに痛そうなのばっかじゃなか!? 手加減せずに本気出してどうすんの!?

「1と2は良いのか、ミツ」  
「1と2は良いのか、ミツ」

友人の指摘を受け光姫は全力で否定している。

ふと時計を見るとそろそろ一限目が始まる時間で生徒も準備を始めている。

今度こそ用は済んだので外道は喫煙室に向かう。

未だに騒いでいる問題児を出席簿の角で黙らせるのも忘れない。

●  
喫煙室。

府熊殿学院の一階の片隅にあるその一室は、生徒には全く知られていない。

学院の設計上のミスにより、出入口の扉が校舎外に作られており、その扉も非常用階段の裏手に隠れる位置にあり人目に付く事はまず無い。

因つて喫煙室を知る者は相当に校内地図を読み込んでいる者か喫煙者くらいだろう。

現在、そこを利用して居るのは黒ジャージ姿に禿頭の男一人。

体育教師五十嵐いがらし 我統がどうは休息を取っていた。

指に摘んだ煙草は、D・Dディーターと呼ばれている物だ。平生で着けている鴉マスクは今外

している。

彼が煙草を吸い終えた時、喫煙室の扉が開いた。

入つて来たのは服を着崩したぼさぼさとした黒髪の眼鏡の男。

我統の同僚である数学教師だ。

「おう外道、そろそろ手前が来るんじゃないやねえかと思つてた所だ」

既に銜え煙草の外道は、我統の呼び掛けに短く返事をして紫煙を吐き出す。

二人は暇があれば喫煙室に足を運ぶので顔見知りである。

基本的に何も喋らない外道に一方的に我統が話し掛ける友人未満の関係と言つた所か。

外道は備え付けのソファアに音を立てて座り込んだ。

その様子を見た我統は外道が苛立っている事に気付いた。

日頃から仏頂面の外道だがそれでも腹を立てる事となると限られてくる。

「手前のその機嫌の悪さは、大方、猫見に關係してゐるだらう」

「……ああ」

我統の推察に外道は眉間に皺を寄せて返す。

心底面倒そうな顔つきで銜えていた煙草を噛み潰した。煙草を無駄にした事で更に不機嫌さが増す。

腹立ち紛れに潰れた煙草を灰皿で磨り潰す外道に苦笑し我統は思いを廻らす。件の少年、光姫は日常的にトラブルを起こしまくっている為、我統の兼任している生徒指導部でしばしば面倒を見ることがある。

・・・不思議な餓鬼だ。

それが我統が光姫に抱く印象である。その印象は、光姫の生まれ付きの獣耳から生じた物ではなく、人柄により感じ取った物だった。我統が出会った人間の中でも類を見ない程に光姫は純粹で、その心の色は年齢に適わない透明なものを持っていた。

我統はつい先日、光姫が校内で起こした騒動を思い出した。

光姫は階段の手すりを滑り台に見立ててショートカットを目論んだが、途中で勢い余って跳躍、2階と3階の間の大窓を回転体当たりでぶち破り、中庭方面へ落下していったのだ。

中庭から騒ぎを目撃していた我統は、

素知らぬ顔で立ち去ろうとする問題児を生徒指導部へ放り込んだのだが、

『まったくなあ・・・、手前が何したか分かってんのかオイ、猫見』

『んくとね、・・・うん、楽しかった！』

予想の斜め上に飛躍した台詞と満面の笑みに、我統も思わず一緒に笑ってしまった。

幸い、当事者を含め怪我人が出なかった事から、光姫に嚴重注意の後に解散となった

が、

・・・・逆に猫見が怪我してねえってのは妙だよな。

苛立ちも薄れたのか新たな煙草に火を点けた外道はぼやく。

「この街には・・・、変人が多い。学院にもな」

「・・・あれ、もしかしてその括り、俺も入ってる？」

問いに対し薄ら笑いを貼り付けて返答とした外道に、我統もまた笑う。

府熊は他所と比較して飛び抜けて灰汁あかくの強い土地だ。

まるで居るのが当然であるかの如く、奇抜な風貌や気性の輩が現れる。魔窟と言って

もいい。

むしろ個性と割り切って何でも容認している土地柄にこそ問題が有るようにも思えて来る。

我統も例外でなく奇抜な外見である。

額きずに疵を有し鴉マスクを着けた禿頭の男など、教員だと判断できる要素が無い。

だが、と我統は反論を作る。

——そう言う手前もその括りから外れてねえだろうが。

言葉に出さず我統は外道を細目でねめつける。



外見は至つて普通の男性に見える。だが、外道忠信という男はこの府熊の中でも異様であつた。

一言で言うならば、淀んでゐる。初対面で目を合わせた我統は、そう直感した。決して当人の悪辣且つ皮肉屋な所を指したのではない。

オーラとでも言うのか、人の持つ活力の証である筈の外道のソレは、死んでいた。

眼鏡の奥、まるで輝いていない双眸そうぼうは対峙する者に多大な疲労感を与えるのだ。

先の猫見が活力で万人を照らす太陽であるとすれば、

外道はその真逆、不快の渦で周囲の者を呑み込んで行く底無し沼だ。

そんな外道の歪みの一端を見たのは最近の事だつた。

○

ある日の放課後、一部の生徒が煙草を吸っていると聞き我統は校内を見回っていた。敷地の奥、プール区画と塀に挟まれた隠れるには具合の良い場所へと足を運んだ時だつた。

それを見つけた我統は啞然とした。そこに居合わせたのは、やはり煙草を吸っていたのだろうか何故かポロポロで崩れ落ちている生徒複数人と、生徒の一人を踏み付けてい

る数学教師だったからだ。

『．．．ふん。おいお前ら、ついてなかつたな。あん？理由だあ？．．．今、とある馬鹿のお陰でちよいと頭に来ててな、そう言う訳だな。．．．暴力教師？何だそりや、まさか俺の事じゃないよなおい。おいおい、何で泣いてんだよ面倒だな。．．．お前ら、三年だろ。しかも野球部が、夏も控えてんにこんな所で油売つてていいのか。ああ、そう興奮するな。しつかりと、話し合いで解決しようじゃねえか。まあ待て、話は終わつてねえ。．．．それで、お前らはこの場所ですつかり転んだ、そうだな？．．．聞こえねえなハッキリ喋れ。俺の目を見ろ。．．．お前らは、ここで、転んだんだな？．．．よし、さつさと帰れ。あ、待て、一つ言い忘れていた。そう警戒するな、只の忠告だ。．．．煙草は二十歳からだド阿呆。．．．ふう、ん？ハゲ五十嵐じゃねえか、お前も休憩か？』

外道は日頃から口も悪いし手も出るのが早い男だ。

だが、そこで見た滅茶苦茶な言動と、ぞつとするような切り替えの速さが、我統には人としてどこか致命的な歪みに思えた。

後日、生徒の一人が退学届を出して来たとき校長が困り果てていた。

外道は変わらず煙草を吹かしていた。

○

「人の教えた事はしつかり覚えとけよ、要領の悪い」

我統が回想を打ち切ると、外道は光姫への愚痴をこぼしていた。

ふと、我統の中には違和感が生じていた。

「ところで外道——」

その事実を初めて聞いた時から我統は不可解に思っていた。

外道の普段の性格や振る舞いと齟齬の有る事柄だったからだ。

それは、

「手前と猫見つて、家族なんだよな？ 養子縁組にだしたとかで」

「.....ああ」

我統の質問で外道の顔に再び険が入る。

「一緒に住んでんのか？」

「一昨年まではな、今は別々だ」

我統の聞いた話では、外道は数年前に養護施設で光姫と知り合い、双方合意で養子縁

組届をだしたそうだ。

不思議なものだ、と思う。普段、校内では周知の事実である程（かなり一方的に）仲の悪い生徒と教師が、一応は父と子の関係であるというのとは。

しかし、その事実を認識すれば外道の苛立ちの理由は我統も何となく理解できる。

詰まる所、猫見光姫の起こした問題の処理は、その殆どが保護者である外道忠信に回って来るのだ。

砕き割られた窓ガラスの修繕費用は、当然、外道が払う破目に為つたのだろう。

連日問題を起こされては怒りが募るのも仕方無い事だ。

だが、やはり根本的な疑問が残っている。

「どうして養子に取ろうと」

「もういいだろこの話は・・・」

質問を続けようとした我統の言葉を外道が重ねて止めた。

外道は声のトーンを下げ、暗い気配を滲ませている。

その意味は我統にも分かる。これ以上踏み込んで来るなという、明確な拒絶の意志だ。

引き際を悟った我統は煙草の灰を落とす事で話の区切りとした。

瞬間、校舎を揺るがす大震動が発生した。

## 淀む瞳の教員 2

●  
化学実験室。

2―B生徒、正生<sup>まさき</sup> 眞事<sup>まこと</sup>は己の判断ミスを中心に後悔した。

一限目の2―Bの授業は化学であった。

担当教師は海越<sup>みこし</sup> 電子<sup>でんし</sup>。

海越は、その機械的なロボットやアンドロイドを想起させる風貌から生徒からは「デジ先生」と言う愛称で親しまれている。

今回の授業内容は溶液の操作を行う物で、

教室から移動し、U字型校舎の一階の隅、化学実験室で実験を行う事となった。事件の発端は眞事の同班の友人、猫見光姫が実験前に放った言だった。

「はいっはいっはい!!マコちゃん、実験やるなら僕に任せてよ、いいだろ?」

勢いよく手を上げて笑顔で申告する猫耳の友人に、本当に実験を任せても良いものだろうか、と言う不安が真事にはあった。

光姫は同班の別の友人二人にも同じく許可を取っていた。

「うん、構わないよ」

「まあ、ネコがやりたいなら、ええんちゃうか?」

あつさりと二人の友人は許可を出す<sup>た</sup>が真事は躊躇<sup>ためら</sup>っていた。

——果たしてコイツが問題を起こさずにいられるのか?

否、絶対にやらかす。逡巡の余地も無く分かりきった答えである。

日頃の行いを顧みる限りは、トラブル引き連れて大行進しているような男だ。

光姫に自由を与えてしまえば、悲惨な事に為るのは目に見えている。

しかし、友として頼みを無慈悲に撥<sup>は</sup>ね除<sup>の</sup>けるのは気が引ける。

出来る事は一つ、釘を刺す事だけだ。

「いいかミツ? 実験中には絶対に、変な事はするなよ……?」

とにかく、光姫が常識外れの行動に走る事だけは阻止しなければならぬ。

「大丈夫だってマコちゃん。僕は本気出さず、真面目にやるよ!」

本気に為られても困るんだが、と真事は思うが、

——まあ、真面目にやるなら良いか。

あとはこつちでフォローすれば問題無いか、と考えた真事は漸く光姫にゴーサインを出したのであった。

そうして一限目の化学が始まった。しかし、真事は見落としていた。

不良でも、人格に問題が有る訳でも無い筈の光姫が何故、問題児と呼ばれているのかを。

光姫は実験の準備は問題無くこなしていた。

騒動は実験の要である溶液の操作中に起こった。

溶液の入ったビーカーを手に取った光姫は、何も無い所で転んだ。

滑った、とも言える。それを見ていた全員が足元にバナナの皮でも落ちていたのではと思ってしまう程に、前傾姿勢に転倒した。

その際、光姫の手を離れたビーカーと溶液は、実験室内を巡回していた海越の頭部、口ポットヒーローを髻ほうぶつとさせるバイザーに直撃した。

「にやつ、あいて。てへへ、失敗失敗。こけたー」

「こけたー、つじやないよこの馬鹿!!」

実験開始から五分と経たずに大失敗を仕出かしたにも拘らず笑っている光姫を、真事は懐から取り出したハリセンで引つ叩く。

——真面目にやってもそりゃ失敗はするよなあ。

もつと早くに気付いておけば良かったが、もう遅い。

悪意はトラブルを生み出す種だ。だが、悪意が無くともトラブルは起きてしまう。無意識に、無自覚に、日常の何気無い行動でトラブルを誘発させる。

それが、光姫が「問題児」と称される所以である事である事を真事は失念していた。だが、今心配すべきは転倒した光姫については無い。

それは、先程の光姫の失敗により皺寄せを食らった化学教師。

「海越先生！大丈夫です、か……」

「がGAGAGA……gggi……ダイ、大ジヨ、ぶ……Pipi・De……ゴ、御座ル。PI……Gaga……《BIGボーンナス突入!!》……〔重大なエラーが発生しました〕PIPIPIPIPIPIPIPIPI……」

頭から黒煙を上げる海越が発したのはラジオのチャンネル合わせの音にも似た電子音。

その目元からは淡い赤色光が漏れ出している。

「お、おいおい、なんや嫌な予感するで。コレは不味いんとちゃうか」

「うん。危険な状態」

他の生徒達も只ならぬ様子を察知してか海越の周囲から身を引いている。

「ん？どしたのデジ先生？おい」



全く状況を理解していない問題児は後で説教するとして真事は早急に指示を飛ばす。「と、とにかく！早く先生を保健室に——」

同時、光量の増した海越の目元から放たれた紅色の閃光が傍に居た生徒に当たり爆ぜた。

「のわあ——!!」

「ぎゃー、ギンちゃんが吹っ飛んだー」

被弾した生徒は転がり、光姫はどこか楽しそうに叫んでいる。既に実験室内は混乱状態だ。

光量は更に増加し、このままでは一気にレーザーが解放されるだろう。

「すごい！めっちゃ明るいぜ。これってそういう実験だったのか！」

「お前はいつまで暢気のんきな事言ってるんだバカ！

ってか今はそれどころじゃねえ！皆、逃げろ——!!」

臨界点を突破した。



「何だ何だ、何が起こってんだオイ。地震……な訳ねえか」

大震動の後、五十嵐は喫煙室の窓を開け外の様子を探っていた。

外道は煙草を吹かしながら震動の原因を考える。五十嵐の言う様に、地震ではない。震動より前に爆発音が聞こえていたからだ。ここまで考えて外道は考えるのを打ち切った。既に大凡の原因が予想出来たからである。そしてその場所は、今なお煙を立ち上げる中心地を窓から顔を出していた五十嵐が発見する。

「あそこは……化学実験室か？今使ってるのは……あ」

考えて思い当たった様に五十嵐は外道を見た。

当然、自身の受け持つクラスの予定は叩き込んでいる。

だからこそ外道には原因の予測及び犯人の特定など至極容易な事だった。

「あの野郎……。一度はりつけ磔にでもすりやマトモに成るか？……無理か」

厳しく罰した程度で問題が改善されるなら問題児とも馬鹿とも呼ばれていないだろう。

あのバカさ加減は誰にも止められないレベルに振り切れている。

「カカ、手前も難儀してんな。ふむ、俺はそろそろ戻るわ。じゃあな」

額の疵を一度指で搔き、マスクを着けると五十嵐は出て行った。

二限目からは外道も授業がある。喫煙室を出て行かなければならないが、しかし、

．．．もう一本。

自然と新しい煙草に手が伸びてしまう。

「次の授業に遅れちゃいますよ。外道君」

○

．．．．．!?

不意に話し掛けられた事に外道は驚愕に目を開いた。

外道は非常に警戒心の強い男である。それは外道のけんかい狷介な性格とそれに準じた生き

方の中で培った物である。

だが、掛けられた声は外道の警戒を透過してきた。

入室時から出入口に注意を割いていたにも拘かかわらずだ。

外道はゆっくりと背後のソファに振り返る。先程まで自分の座っていた場所には人が居た。

パタパタと足を振っているのは、今朝、校門前で見かけた銅像と寸分違わぬ背広の男。

「あんたか．．．」

「やはは、おはようございます。外道君」

府熊殿学院学校長、明石あかし笑平しょうへいがそこに居た。

府熊の地で最も素性の知れない男であり、噂に事欠かない人物である。

曰く、100歳を越えているとか、歴史に名を残す偉人の変装であるとか、同じ形のクローンが大量に居るとかエトセトラ……。

噂の真偽がどうであれ奇人である事は疑いようも無い。先ずその外見。

ゴムボール。笑平に出会った者が最初に抱くであろう、彼の頭部を指した単語である。

その意味は決して五十嵐のような禿頭を揶揄した物ではない。

確かに髪は生えてないし丸くてツルツルしてるがそうではなく、ゴムボールそのものなのだ。

過去に一度、外道が断り無しに頭頂部を振り上げたところ30cm程伸びたので間違いない。

「最近の調子はどうですか」

ボール頭からたわいない話が切り出される。

それなりに、と曖昧な返事で応える。

外道としては真意の読み取れない笑平とともに会話する気など無かった。

「猫見君との仲は良好ですか」

「毎日問題持ち込んで来るんで叩いてばかりですよ」

適当に会話を切り上げようとしていた外道は、続いた笑平の質問に即答してしまった事に顔を顰めた。

——バカの話題を振って来るとは思つてなかつた。

「やは、大変結構な事です」

外道の心中を知つてか知らずか、笑平は楽しそうに笑い、更に続ける。

「しかし、暴力と言うのは得てして悲劇を招き易い物です。

気を付けてくださいね。生徒達は繊細で傷つきやすい年頃ですから」

しっかりと言い聞かせるように、笑平は外道に言った。

こんな珍妙な格好していても教師としての一面を見せるあたりは流石と言つた所か。対して外道は歪んだ笑みを付けて返す。

「へえ、やはり生徒の安全を気にしてらっしゃるので、学校長殿」

無論、皮肉である。外道には暴力に対する忌避の感情など無いのだから。

暗に笑平を見下す外道を見つめて、笑平は、やは、と笑う。

「ええ、勿論です。生徒達は私の宝物ですから。外道君、君もね」

それは、

「覚えていますよ。15年前、君は我が校の生徒でした。」

・・・生憎と途中で来なくなってしまいました」

外道も覚えている。確かに過去、学院の生徒として在籍していた。

しかし、当時の外道は今以上に死んでいた。

だからこそ姿を消し、どうしようもない生き方を選んだのだ。

「昔の事だ・・・。もう、あんたの生徒じゃない」

「変わりませんよ。私は皆さんの先生ですから。何時になっても皆さんを生徒だと思っています」

笑平はそう断言する。これだけは絶対に譲れないと声色で語っている。

そこで話が途切れたのをこれ幸いと、外道は喫煙室を出て行こうとする。

「煙草は体に悪いですよ」

部屋を出る際に掛けられた言葉には応えなかった。



学院の一階にあるとある一室。

薬品と湿布の匂いで充満し、壁際にはシーツを張ったベッドが三つ置かれている。

保健室だ。普段、保健室に来る者は少ない。主な理由は三つある。

単純に怪我をする者が少ない事。

仮病を使ってサボりに来た者を保健医が叩き出す事。

そして最たる理由は、その保健医が不在の時間が多々あるという事だ。

「ああ面倒臭いね、アタシ今凄い腹立ってんのよ。分かるかい鹿羽？」

「ええ、．．．分かりませんよそんなん」

保健医、あまぎしずか天城 静は腹を立てていた。

出勤して早々に、運ばれてきた男二人の治療をしなければならぬ状況にあるからだ。

一人は全身を擦りむいた2―Bクラスの生徒。もう一人は、

「化学の授業中って言ったっけ？．．．何したらあんな事になんのよ」

「あゝ．．．、いろいろあったとしか言えませんか」

傍らのベッドを一瞥する。そこに横たえているのは黒く焼け付いた鉄屑、にしか見えない化学教師だ。

よくもまあ自分が出勤するまでにこんな重症患者を用意したものだ、と静は顔を顰める。

だが、実際はそんな事など些細な問題である。静の怒りは別にあつた。

「あゝもう！3回もリーチかかって全部外れてどう!? なけなしの金すっちゃったじゃ

ないの!」

「いや、そんな事俺に言われてもアイタタタツ! っちよ先生、薬塗り過ぎやて染みる染みるっ!」

静は生粋のギャンブラーである。保健室に居ない時は博打をしに行っている。

自分の人生を博打に捧げていると言っても過言ではない。学院の三大反面教師と呼ばれる内の一人だ。

静の怒りはパチスロでの大負けから来たものだった。

「んな愚痴を俺に言うてどうするんですか・・・」

「あん? 何言つてんの鹿羽、治療費の代わりに愚痴聞いてもらつてんだから感謝して欲しいぐらいだわ」

タダやないんですかつ、と言う叫びは無視しておく。こっちは金さえあれば直ぐにでも再戦したいのだ。

「うるさいよ、ハイッ応急処置終わり。金払わないんならさっさと出て行きな邪魔だ。

アタシはまだこっちのポンコツも診なきやいけないんだ。ほらほら二限目もあんだろが」

静は残念賞としてパチンコ店からくすねた大量のティッシュ箱を投げつけて生徒を追い出した。



そうしてベッドの化学教師に向き直る。

—— つつても、コレ保の修理なんてアタシ健の仕事じゃ無いわな。

腕の良いヤツ呼ぶか、と電話帳を探す。

だがその前に——

「うるさいねえアンタ」

運び込まれてから今までは放っておいたが、

未だにノイズ混じりの機械音声を垂れ流す男性教師は大層やかましい。

「こういうのは大抵どっかにアレがついてるもんだろ」

そう言うのと静は患者の体をぺたぺたと触れて調べる。

「おっ、コレだ！」

OFF/ON

オンに傾いていたスイッチを反対方向に弾はじき、機械音が止んだのを確認すると今度はそ電話帳を探し始めた。

一限目の化学で事故が生じたが予定通りに二限目の授業は2—Bで行われた。科目は生物。学院では数学と並んで教室が静かになる授業として有名である。

その原因たる人物、生物教師木原きはら潮うしほは黒板にいくつかの図を書いている。

「ヤ！一つの細胞にはこれだけのモノが詰まっているという事だネ。」

細かい説明に移る前に質問あるかネ？」

振り返り木原は焦点の合わない瞳をぎよろりと動かす。

しかし、生徒からの反応は無い。静けさに満ちていた。

今まで黒板の内容を写していた者もこの瞬間は顔を伏せた。理由は有る。

——木原潮は目を付けた者に自作の薬剤（毒）を処方しようとする。

それが木原の授業を一度でも受けた生徒の共通認識である。

行動そのものは木原の善意に因よる物かも知れないが、うっかり薬を貰った者が次の日に欠席する、等の被害報告が重なれば、当人が学院中の生徒から「マツド先生」という渾名で呼ばれるのも仕方が無い事と言える。

木原が黒板に向き生徒が顔を上げ始める中で喋る者がいた。光姫だ。

「なあなあ、ギンちゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ギンちゃん、ギンちゃんってば」

「はあ……、なんやネコ……」

光姫に話し掛けられた長身瘦躯の生徒、鹿羽しかばね 銀二ぎんじは怠だるそうに返事をした。

体の各所に湿布と絆創膏を貼っているのは、一限目に海越の放ったレーザーの直撃を受けたからだ。

「分かんないから教えてよ」

「それで……どこが分からんのや」

「ん〜とねー……全部！」

「諦めや」

少しなら教えてやろうと銀二は考えていたがコレは論外である。

「即答!? た、他人事だと思つてやがるな……!?!」

実際、他人事やけどなあ、と思ふが取り合うのが面倒なのが本音だ。特にこの授業では。

「や、何を話してるのかネ?」

「うげっ」

会話が聞こえていたようで木原が近付いて来た。銀二は思わず声を出して唸った。

銀二は生物の授業、というか木原の犠牲者の一人であった。

入学当初、不運にも生物の授業で薬を受け取ってしまったのだ。(この時は木原を知らなかった)

幸い、卒倒するような物では無かったものの、その日は一日中寒気に襲われ続けた。

それ故に、その授業以降は目立たぬよう心掛けていたのだが、

「ヤヤツ!? 鹿羽クン怪我をしているのかネ! そんな君にピッタリのモノがあるヨ!」

木原はそう捲まし立てると自身の鞆をあさり始めた。

怪我をしている者を木原が放っておく筈が無い。銀二は己の失態に気付いた。

「ヤ! あったあつた、これだヨ!」

鞆から取り出されたのは透明な小瓶だった。中には形容し難い紫色の錠剤が入っている。

あまりにも禍々しい色のソレに周囲の生徒が小さく悲鳴を上げる。

「これは自然回復力を増幅させるんだヨ! さあさ飲みたまエ!」

鼻息を荒くして木原は詰め寄る。

「え、遠慮しときますわ」

「遠慮しなくてもいいんだヨ、さあ!」

遠回しな断りでは意味が無い。

「大丈夫ですつ、大した事無いですわこないな怪我!」

じりじりと距離を詰めてくる木原に銀二は多少語気を強め、内心では早く諦めろと  
只管ひたすらに念を送る。

「ヤ、そうかね？残念だけドまた今度にするヨ」

やつと諦めよつた！と歓喜の声飛び出そうになるのを呑み込んだ。

漸く教壇に戻る動きを見せた木原だが、傍らの猫耳少年を一瞥して気が変わる。

「ヤ！猫見クン今日も元気そうだね！ちようど元気を促進するサプリメントがあるヨ  
！」

興奮した様子で今度は深緑色のカプセルを取り出し、周囲は席を引いて遠ざかる。

対する光姫は柔らかな笑みで、

「何コレくれんの？わーいありがとマッド先生」

「スト————ツプ！考え直せミツ！」

「ちよい待ちいや、暢気過ぎるでネコ！」

「止めた方が良い」

飴玉を放り込むようにカプセルを飲むとする馬鹿を周囲が押さえつける。

そこで二限目終了のチャイムが鳴り響いた。

「ヤ！終わってしまったネ。それは君に贈るヨ猫見クン。では！」

木原が去ったことでクラス中から安堵の息が漏れた。

「ソレ、どうすんだミツ」

真事が未だ光姫の手にあるカプセル危険物の処理を尋ねた。

「うくん、……そうだ！ハルちゃん雲野先生に上げよう！」

「止めたげて!!」



「はいココに注目、重要な構文よ。よく出てくる形だから覚えましょう。

‘ even if ’、だから、この文の訳は——」

言つて英語教師、雪平良虎は例文の訳を書き込んでいく。

「たとえあなたに嫌われても、私はあなたを愛するでしょう」

—— あら、凄く情熱的……

己の書いた訳文を見て良虎は、ほうと感嘆の息を零した。

腕時計を確認すれば三限目はもう五分ほどで終了する。故にそこで切り上げることにした。

良虎はチョークを払うため金髪を掻き揚げる。

その所作は見るものを惹きつける程に流麗で艶やかさを含んでいる。

男性を魅了する美貌を持って生まれた良虎は、今現在悩みを抱えていた。恋の悩みである。ある男性への想いが良虎の心の内の大半を占めていた。

男性は良虎と同じ学院の教師。

——— 外道君 . . . . .

○

雪平良虎はアメリカ人の母と日本人の父の間に生まれた。

母の方を色濃く継承した容姿で幼い頃から周囲にはお姫様のように可愛がられてきた。

小学校に入学して良虎は他人との差を認識し始めた。

体つきの大きい者、髪の毛の長い者、顔つき等、そういった差は性別も深く関わりと良虎は知った。

では自分の性別は？先の例に照らせば当然女だろうと親に聞いた。

だが事実は違った。良虎は自身の性別が男であると教えられた。

その事実を聞いた良虎に不思議と驚きは無かった。

しかし、男であると分かったことで、性別の境と言うものが理解出来なくなった。

既にその当時、良虎の部屋は可愛らしいぬいぐるみや人形等のグッズで埋め尽くされていた。

着ていた服は一般に女物と呼ばれる物しか無かったし、父や母も特に何も言わなかった。（と言うか母はむしろ良虎に可愛い服などを勧めていた）

男女の差と自分の性別に悩んだ良虎だったが、両親から受け継いだ豪放磊落で快活な気性は大きく悩むことを善しとしなかった。結果として、'どっちでもいいや'、という答えを出すに至ったのだった。

成長するにつれ更に容姿に磨きが掛かり女性と間違われる事が多くなった。

何時のことだったのだろうか、良虎を女性と勘違いをして言い寄ってきた男を手酷くフった事があった。

良虎が男だと解った時の男の顔が印象的であった。そして、意外にも面白いと感じた。

この時から男をからかう癖が出来た。男っぽい自身の名は好きになれずリョウコと名乗るようになった。

二十歳を迎える頃には、幼少期に憧れた少女マンガの恋愛など忘れてしまっていた。

外道忠信と出会ったのは良虎が25になる年、府熊殿学院に赴任して初めの事。

初の顔合わせでは、教師にしては精悍で目付きの悪い男というのが外道に得た印象



だった。

同時に良虎は、この人をからかったらどんな反応をするだろう、といった衝動に駆られた。

内なるからかい癖に押された良虎は外道にアプローチを試みた。

『これからよろしくお願いします外道さん。気軽にリョウコと呼んでください』

そう良いながら握手を求めた。顔に貼り付けたのは長年磨いた男好きの笑みだ。

だが、対する外道の反応は予想外過ぎた物であった。

不意に近付いて来て良虎の胸倉を掴むとヘッドバットを見舞ったのだ。

頭の痛みでへたり込んだ良虎に外道は表情を変えずに言った。

『気色の悪い事してんじやねえぞ、半端者』

外道の言葉は良虎の心を強く打った。

その時やつと自覚した、己のしていた行為の浅ましさを。

良虎は今までの人生で周囲に甘え続けていた己の有様を恥じ、

強い叱咤で打ちのめしてくれた外道という男性が気になり始めた。

新たに生まれた衝動が恋だと気付いたのは少し時間が経ってからだった。

○

外道と出会い良虎は変わった。自身の性別は自己紹介の際、先に伝えることにした。だが、府熊の土地柄故か、良虎が周囲に受け入れられるまでの時間は極端に短かった。一方で、現在までの一年間、手を替え品を替え外道へのアプローチを続けているがうまくいっていない。

——今朝も逃げられちゃったし、魅力ないのかな私……

恋をしてから以前にも増して女性的魅力に磨きが掛かり、性別を知っている男性（外道除く）すら悶々とさせている事を良虎は知らない。

——今日はお昼を誘ってみようかな。……いや、ここは思い切って晩ご飯も……

「……おい、リヨウコがまたクネクネしてるぞ……」

「誰か質問しろよ……」

「いや、止めといた方が……」

教室がざわつき始めたのを感じた良虎は振り返る。

「何か質問かしら？」

答える生徒は居ない。否、元気良く手を振る者が一名。

「はいはい！リヨウコちゃんは何でクネクネしてんの？」

まさか本当に質問するとは……、とクラス中の視線が光姫に集まる。

光姫のことを良虎は気に入っている。

明るい気性同士直ぐに打ち解けたという事もあるがもう一つ、外道の話題を共有できるからだ。

「外道君を晩ご飯に誘おうか迷ってるんだけど、猫見君何か無い？」

「ん〜ゲドちゃん料理苦手って言ってたかなー」

お？これは良い情報ゲット！と良虎は微笑む。

「あつ、あとさ、もう一個質問あんだけどさ」

猫耳を揺らしながら光姫は続ける。内容は、

「リヨウコちゃんって男の人が好きなの？」

今更かよっ！とクラス中からツツコミを受けて光姫は首を傾げる。

純粋な少年を見ているとここ暫く鳴りを潜めていた良虎のからかい癖が顔を出した。

「ふふ、猫見君、あのね」

人差し指を唇に当てる。

「好きになつたならどつちでも良いのよ。性別なんて、ね・・・」

生徒全員が顔を引き攣らせたのに満足し、良虎は歯を見せた。

「外道くーん」

「・・・」

三限目が終わり次の授業へと向かっていた俺は運悪く雪平と遭遇してしまった。

コイツ、俺を見つけたたびに近寄ってくるから本当に面倒臭い。

どんなに罵り叩きのめしても嬉しそうに話し掛けてくるのでマゾヒストではないかと疑っている。

「今日のお昼一緒に食べない?」

「一人で食つてろ」

えー、と残念そうな声を出しているが何とも白々しい。

どうせ昼になればこの金髪は勝手に俺を捜すだろう。

「じゃ、じゃあ晩ご飯はどうかしら。私が作ってあげようか?」

「あ・・・?」

今日はまた随分と踏み込んでくる。

・・・そういやコイツ、あのバカとも仲が良かったな。さてはバカが何か吹き込んだか。

「猫見君から聞いたわよ。料理するの、苦手なんですよ?」

問題児  
アイツには後で15割増しの拳骨でもくれてやろう。

それと、女装野郎は勘違いしてるようだが、俺は料理が苦手な訳じゃない。作つても碌な事にならないだけだ。

「なんなら映画でも観に行つたりとか・・・」

何が恥ずかしいのか人差し指を突き合わせている仕草は見ていて苛々する。

それに、お前こないだ意味不明なタイトルの映画に俺を引っ張っていつて締め上げられたの忘れたのか。

「今の流行りはねえ、‘戦祭—夏の陣—’とかどう？」

「観ねえ、行かねえ、お前と飯も食わねえ、失せろ」

大仰な落胆のポーズを取る雪平を振り切つて俺は授業に急いだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

チヨークが黒板を打つ音のみが教室に伝わる。

2—Bの四限目は数学。担当はクラス担任である外道だ。

「写しとけ・・・」

黒板に授業内容を粗方書き込んだ外道は生徒に板書を写す時間を与え一息を入れる。そして、教室をざっと見渡すと目に付いた生徒の所に足を運ぶ。

「おい……起きろ」

「スピー……、スピー……、スピニャン!？」

「寝るな阿呆が」

背中を丸めて耳と目を閉じていた光姫は拳骨一閃で覚醒した。

「に、にやあ、おはようゲドちゃん」

「あまりに真面目にやらんようなら今朝の三択を全て実行する事も吝かではない」

「こちらあソコ！可愛い生徒を脅迫すんなよ！しょうがないから本気出さずぜ！」

なら最初から本気出せよ……、とクラス中から非難の目が注がれるが光姫は気付かない。

外道は鼻で笑う。

「本気でやった所で無駄だ。お前は馬鹿だからな。……馬鹿だからな」

「に、二回もバカって言った……!アツタマ来た、見返してやるからなゲドちゃん!」

「やってみろ、丁度今から小テストだ」

「え……!？」



十分間の数学小テストは残り時間二分ほど。

時間の余った者はシャーペンを置くか見直しをしている。

「マコちゃん」

「……………(静かにしろ)」

光姫の前に座る真事は背後からの呼び掛けに注意の視線を送るが理解されていない。

「ねえ、ちよこつと教えて欲しいんだけどさ」

「……………(お前どうせ答えまで教えろつて言うだろうが)」

非難の視線にも気付いていない奴だ。尚更教えるわけにはいかない。

それにこの時間、下手に取り合えば暴力教師の巻き添えを受ける。

外道が気付いてない内に何とかしておきたい。

しかし、この時既に外道は光姫の私語を捕捉していた。

だが外道は動かない。どうせなら授業終わりに全て加算してぶん殴ろうと考えていたからである。

「マーコーちゃんー」

「…………頼むから今は黙っててくれミツ」

「ちくしよ薄情者め、これでも食らえ、うりやうりやつ」

「お、おいバカ止めろっ」

すげない対応にむきになったのか、光姫は真事に机の小物を投げつけ始めた。

だが、些か乱雑に投げすぎた。

外道の耳に、あつ、と生徒の声が聞こえるのと同時、何かが頭にこつんとぶつかり落ちた。

文房具、消しゴムだった。

「あわわっ、ヤッペー、どどどどうしよう．．．!？」

おもむろに椅子から腰を上げた外道に慌てたのは光姫だ。

外道は日頃と変わらぬ無表情に見える。しかし、外道と付き合いの長い光姫には分かる。

顔から感情が消えた外道は、本気だ。

光姫の頭を鷲掴みにして外道は問い掛ける。

「さて、猫見、何か言いたい事はあるか．．．?」

「え、えくとね、その、ゲドちゃん?怒ってる?」

「MK5だ」

「ひいつ、だ、だけど負けねえぜ受けて立つぜゲドちゃん!来いよ!」





四限目終了のチャイムが鳴る中、社会科目教師の白瀧しらたき 薫は休息を取っていた。  
場所は学院の一階、中庭である。

彼女は中央の池の前のベンチに腰を下ろし、持参した菓子を頬張ってほくほくとしていた。

しかし、和やかな空気は吹き飛ぶ。

不意に飛来した何かが池に激突し強烈な水柱を立てたのだ。

「わひゃああ!!え?え?!え!?!」

薫は突然の事に理解が追いつかないが、池には人の姿があった。

池に頭から着水した人物は跳び上がるともんどりを打って着地した。

「ね、猫見君?」

人物は薫も良く知る生徒、光姫だった。上着の至る所に池の藻が付着している。

光姫は体中に滴る水気を獣のように振るい飛ばす。

「くっそうゲドちゃんめ三階からぶん投げやがって、あ、カオリちゃんこんちはー、おつかつオ煎餅だ、これ美味しいよね一枚もらうね、僕ちよつとゲドちゃんに文句言わない

といけないから、そんじゃね」

○

四限目が終わり、外道が生徒の質問を受け付ける時間を設けた2―Bクラスに、体中に藻を貼り付けられた問題児が舞い戻ってきた。

「ちよつとーゲドちゃん！何も池に投げなくてもいいだろ!?タオル貸してよ！」

「お前が悪いしタオルも持ってない。近付くなよ俺が濡れるだろが」

「こ、この野郎保身に余念がねえな・・・!?」

「うるせえぞ、服乾かしたきや窓際にでも干しとけ」

言われ上着を脱ぎ始めた光姫は唐突にイタズラ子供の笑みを浮かべ、

「仕返しだぜゲドちゃん、これでも食らえ！てい！」

水分と藻でコーティングされた上着を外道に叩き付けた。

○

中庭のベンチで再び休憩を取り始めた薫だったが、再度飛来した光姫が目前の芝生に

突き刺さり瞬く間に奇怪なオブジェと化した。

「きやわつ！な、何ですかこれえ!？」

上半身が丸ごと地面の中に消えたオブジェは一度足をバタつかせると、器用に足を地に付け弓なりに体を引き抜いた。

「いってゝ、もう僕は怒ったぜゲドちゃん待ってるよ！あ、カオリちゃん煎餅もう一つもらうね」

「え、猫見君ちよつと！．．．これどうするんですかあ．．．」

残されたのは薫と光姫のぶち抜いた芝生の大穴だった。

○

2—Bクラスを出た外道に上半身土塗れの光姫が突撃した。

「フシャー！せめて池に投げろよなイテーじゃんか!!」

「さつきと言ってる事が違うぞ馬鹿」

「黙らっしゃい！僕の怒りを思い知れ！」

光姫は天井に届くほどに跳躍し怨敵に襲い掛かった。

「必殺の、猫パンチ!!」

○

休憩を中断し、芝生に出来た大穴を埋め立てていた薫は、再び池に飛び込んだ光姫の立てた水柱を至近距離で浴び涙腺が決壊した。

「つぶはー！つてあれ？カオリちゃんどうして泣いてんの!？」

## 淀む瞳の教員 3

● 煙を上げる建物がある。

排気口より出るのは白い水煙だ。ボイラーから噴出する煙は周囲に熱を伝え拡散する。

府熊殿学院の中庭から続く渡り廊下より通じるその場所は、昼食時に多くの者で賑わう。

食堂である。

その一角、20人程が座れる長机の隅に、外道は居た。

〈美味い・安い・早い〉をモットーに多彩な料理を提供する食堂は、外道もよく活用している。

外道の目の前に置かれたラーメン・半チャーハンセット（500円）は特に気に入っているメニューだ。

黙々と料理を胃に収めていく外道に近付く者が二人。

「外道君、ここに座って良いかな？」

「こんにちは外道先生」

嫌だと拒否する間も与えず、外道の隣に座ったのは、英語教師の雪平良虎。その隣に続いたのは、社会教師の白瀧薫である。外道は薫の目元が僅かに赤いことに気付くが、面倒なので無視した。

二人とも手に持っているのは、食堂の人気メニューである日替わりサンドイッチパック（300円）だ。

飯時の闖入者ちんにゆうしやに眉を顰めて不快感を露あらわにした外道に気付かず、

良虎は己のバックの中からベーコンレタスの物を取り出しながら話し掛ける。

「ねえ、本当に映画、観に行かない？きつと面白いわよ」

「くどい。そんなに行きたけりゃ白瀧と行け」

外道は箸で薫を指し示す。指された薫は、仲の良い友人である良虎の恋愛事情を聞かされている為に苦笑いするしかない。冷たい想い人の反応に、良虎は諦めない。

「つれないわねえ。．．．あ、そうだ！私が外道君に料理を教えるなんてどう？」

また面倒な事を．．．、と外道はニコニコと笑っている良虎を横目で睨み付ける。

良虎の提案を飲む理由など、外道には無いのだから。

良虎は外道が料理下手だと思いいているが、それは正しい認識ではない。

外道の料理センスは悪くは無いし、手際も人並み以上だと言える。

だが、その作った料理には致命的な問題が有るのだ。

「それで外道君が上手になつたら私に作ってくれたりとか・・・」

「ほう、俺の料理が食いたいのか。今すぐ食ってみるか？」

えっ？と呆ける良虎を他所に外道は傍らの鞆を漁る。目当ての物は直ぐに見つかった。

タッパーに入った赤と白で彩る料理、麻婆豆腐だ。

「それは、まさか・・・外道君の手作り!？」

外道の好物は中華料理である。外食は元より、アパートの冷蔵庫に詰められたコンビニ弁当さえも、中華系統の料理が入っている。過去、自炊を始めた外道は、料理の腕の向上を目指し中華料理作りに時間を費やした。その中で最も得意な料理が、麻婆豆腐であつた。

取り出した麻婆豆腐は外道が間食用に作ってきた物である。

「ああ・・・いるか？」

外道が言い終わるより速く、良虎はタッパーをひつたくるように受け取っていた。

「食べていいのね!？」

外道には、目を輝かせてまで若干冷えた麻婆を食べたがる理由に見当がつかないが、

了承する。

返事を聞くや否や良虎は麻婆を口にした。

「もぐもぐ．．．うん！美味しいわコレ！ちよつと辛いけど．．．あれ？酸っぱい？いやでも苦っ?!」

何口かで麻婆を咀嚼し、顔をほころばせていた良虎の言葉が、最後まで紡がれる事はなかった。

「わわっ、何ですかリョウコさん」

タマゴサンドを栗鼠のように頬張り舌鼓を打っていた薫は、

不意に隣の良虎が自身に背を預けて来た事に驚く。

友人なりのスキンシップかと思っていたが、呼び掛けても反応が無い。

「きやあーあいたあ．．．。ちよつとリョウコさん！」

徐々に増していく友人の荷重に耐え切れなくなった薫は、椅子から落ちてしまう。

イタズラが過ぎる友人を叱ろうと、顔を向けて異変に気付いた。

目を閉じている良虎の顔は青い。

気絶していた。

「ええええ!!リョウコさんどうしたんですか?!え、ええつと、取り敢えず保健室に連れていかなきゃ。よいしょ、うう重い．．．。あ、外道先生手伝ってください！」



「じゃあな白瀧」

なんとか良虎を背負い上げた薫だが、体格に差がある為にふらつく。頼みの綱であった外道は我関せずと言う風に席を離れていた。

「こういう事だ、諦めろ雪平」

食べ終えたラーメンセットの食器を返却しながら、外道は一人呟く。何時だったか、自分の作った料理が高く評価された時期があった。

何故だったか、その自作物が一撃必殺の暗黒物質へと姿を変えたのは。「ま、ついてなかつたな。なんせ——」

——俺の料理スキルは終わっちまってるからな。

小さく呟かれた言葉は、すぐに食堂の喧騒に掻き消された。

気を失った良虎を精一杯運ぼうとする薫を横目に、

外道は食べかけの麻婆豆腐を、容器ごとゴミ箱に放り込んだ。



「で、薫よう、何なのコイツは？」

「えつとお、食堂で気絶して．．．」

保健室。

重症患者の化学教師を、工学技師ごと病院へと送り出した天城静は、

やつとのんびりできる！と保健室のベッドに転がり昼寝を開始しようとしていた。

だが、唐突に保健室に飛び込んで来た同僚の後輩によって邪魔されたのだった。

患者を運んで来た薫は、一人で自身より大きい者を背負って来た疲労と、静の鋭い視線を受けて泣きそうになっている。

「ふうん、食中毒かねえ。ウチの食堂で今まで出たなんて聞いてないのに、なあんでアタシの機嫌が悪い日に限ってこうも人が来るんだ！ああイライラする」

「ひつ！す、すいません。あの．．．リョウコさんは．．．」

「あ？ああ、アタシが看とくよ。つっても病院送るだけだがね。」

「アンタ次授業だろさっさと行きな、ほらティッシュやるから」

静は薫にティッシュを押し付けると、保健室から放り出した。

静は救急車を再び呼ぶため電話を取るが、

「アンタもうるさいねえ」

先程ベッドに寝かした英語教師が、かなり大きな寝言を叫んでいる。

「ああ、外道君の料理．．．ふふふ」

「どんな夢見てんだか、アタシも寝たいよこんにやろう」

蒼くなった顔つきで、何故か幸せそうな寝言を叫ぶ患者にチョップをかまして電話を掛けた。



府熊殿学院の校則は、他校に比べて非常に緩い。正確に言うくと、守るべき校則が少ないのである。

伝統ある高校としては異例の少なさであり、明確に定められた校規は、その数僅かに三つ。

学院の案内書には、校長の書いたと思われる達筆で、

壹 明るく楽しく学校生活を過ごしましょう

貳 健康に気を付けましょう

参 授業をしつかり受けましょう

と書かれてある。

一番は果たして校則なのか、という疑問はさておき、これでは緩いと言われても仕方が無い。

要は、注意されているのは、健康と授業態度のみ。

禁止されているのは、酒や煙草等の健康を害する物ぐらいである。

下手すれば無法地帯となりかねないレベルの緩さだが、

そこは生徒指導部と風紀委員が目を光らせる事で、行き過ぎる行為を規制している。

それ故に、両組織は、年間に膨大な仕事量を要求される為、過労で倒れる者が後を絶たないのが現状である。

○

学院に入学すると、制服が支給される。

しかし、校則に制服の規定は無いし、指定制服でもない。

制服を自分好みに改造する生徒は多いし、中には、校長に申請して好きな服装で登校してくる者もいる。

反して、2―Bクラスは、そういった生徒は少ない。

単に、真面目な生徒が多いという理由だけではない。

入学式の翌日、早速、制服を改造してきた生徒に対し、暴力教師が、

『うぜえ』

の一言の元に蹴り飛ばした出来事は、伝説と化している。

だが、例外的な人物も、居るには居る。

事ある毎に制服を脱ぎ捨てて居る猫見光姫、あと一人、

「.....」

長身のジャージ姿の少女、七品ななしな名無ななしだ。

白の生地紺のラインを走らせるジャージ一式に身を包む彼女は、ひどく単純な、身体を動かしやすい、という理由で、ジャージでの登校申請をしていた。

黙々とノートに板書を書き写していた名無は、一度筆を止め、教壇に立つ人物の言葉に耳を傾ける。

現在、六限目は国語、教師雲野遥うんのほるかは、柔らかい笑みをクラスに向けている。

「では、ここらまでで何か質問はありますか？」

雲野の授業は、懇切丁寧で非常に分かり易いと、名無は思っている。

仮に、分からない所があってもしつかりと説明してくれるので、本当に良い教師だと思ふ。

今、この場で質問する者はいない。名無の前に座る問題児が手を上げるまでは。

「はい、ハルちゃんしつもん」

「はい、猫見君、なんででしょう？」

「えっとね」

「おいミツ、何質問する気だ」

雲野の促しに、質問しようとした光姫を、前列の真事が止める。

「へ？何って」

「雲野先生の説明は分かりやすい、何故・・・？」

真事の制止の意図を名無が継ぎ足す。

「いや、分かんなかったというか」

「昼寝こいて聞いとらんかったの間違いちゃうか」

光姫の言い訳に、隣席からにやけ顔の銀二が止めを打つ。

うぐ、と唸った光姫に真事が顔を寄せて小声で話す。

「お前、さっきの授業で質問しまくって白瀧先生泣かしたのもう忘れたのか」

遡って五限目、2―B生徒は、極度の泣き虫である社会科教師が教室に入ってきた時点で既に目元が赤かったのを見て嫌な予感がしていた。授業が始まり、案の定、問題児の質問攻めで教師が崩れ落ちるのに大した時間は掛からなかった。

「大丈夫だって。ハルちゃんだしさ」

「授業が進まないだろバカっ」

人の良い雲野は、光姫の質問にも答えてくれるだろうが、

授業を聞いていなかった問題児に取り合う事は、授業を繰り返す事と大した違いは無  
い。

友人二人の遣り取りを静観していた名無は、

光姫と話していた真事が視線のみを己に移した事に気付いた。視線の意味は、

——ちよつと、コイツを大人しくさせといてくれ。

．．．ん、了解。

名無は、視線の意味を汲み取ると、光姫に手を伸ばした。

「んん？どつたのナナちゃ」

「ミツキちよつと黙ってて」

ゆつくりと、蛇のように、腕を光姫の首に巻きつけた。

きゆう、と小動物を思わせる鳴き声を上げて、光姫は机に沈んだ。

「あー、ネコが落ちよつたわ」

「おいナナ、何やってんだ!？」

「．．．？でも、さつき黙らせてって．．．」

何か間違つた事をしてしまったのだらうか。

教壇の雲野も、突然気絶した光姫にぼかんとしている。

「抑えといってくれて意味だつたんだが．．．」

「(づ)めん……」

自分は思い違いをしていたようだ。

叱られた名無は少し落ち込む。

「あーいや、まあ、全く間違ってるって事は無いが……、次からは軽くていいから、な？」

「……うん、じゃあ次からは首トンにする」

「……気絶させなくていいから」

「あの、猫見君、大丈夫ですか？」

「あ、気にせず進めたってください先生」

その後の授業は何事も無く進行した。



放課後。陽は沈みかけ、生徒の殆どが帰宅した学院の校舎には、各運動部の掛け声が響いている。

明日の授業の準備を終えた外道は、帰り支度を整えていた。

現在、職員室には己を除く教員はまばら、己の周囲には英語教師ヘンゲイも生物教師キョウブも居ない。



面倒事に巻き込まれずに帰るには、今が絶好のチャンスである。

この機を逃すまいと、外道は出入口の引き戸を開けた。

引き戸の向こう側に人を視認すると同時に、凄まじい酒気が外道を襲った。

「……………っ!」

「おう、ココに居たかい。捜したよう」

外道に話し掛けたのは、手に一升瓶を持ち、髪をオールバックに纏めた痩せ型の中年。

生徒指導部長、うぎりつかさ雨切 司だ。

「酒臭い、近付くんじゃねえぞ、おっさん」

「にひ、君も飲むかい?」

笑いながら一升瓶を差し出して来たのを突き返す。

瓶に口付けて、至福だと言わんばかりに目を細める中年男。

己の記憶違いで無ければ、生徒指導部長とは学院で1・2を争う激務の筈だが。

……………飲んだくれこんなのがトップで大丈夫か生徒指導部……………

「仕事が溜まってんじゃねえのか、おっさん」

「にひ、他の人達が優秀だからねえ、任せてきちゃったよ。

で、今は君に用があるんだよねえ、外道くん」

言って、中年の懐から出されたのは書類。

「何だコレは……」

「ソレね、ほら、昼間に化学実験室で騒ぎあったでしょ？2―Bの授業だったよね。」

破損した器具とかならウチの方でも金が降りるんだけどねえ。海越くんが意外と大怪我らしくてさ、

そつちまでは手が回らないんだ。やらかしたの猫見くんだし、押し付けるように悪いけど払つてね」

イイ仕事をしたと笑い、一升瓶を呷ると雨切はフラフラと立ち去った。

手元の書類には、治療費と思われる数字。

・・・来月の小遣いを無しにするか。・・・いや、鉄拳制裁が先か。

外道は問題児の処罰を考えると、一通り目を通した請求書を即座に握りつぶした。雨切の撒き散らした酒気の残り香が、いやに鼻に付いた。

●  
府熊殿学院図書館。

生徒から「本の国」と呼ばれる二階建ての木造館は、校舎に隣接している。

市立図書館以上に、多種の書籍を収めるその場所の管理は、司書と図書委員で行って

いる。

司書、鏡かがみ 本子は、消灯時間になり、先に委員の生徒を帰すと、最後の点検をしていった。

膨大な量の書籍を内包する図書館は、収納式の本棚や床下倉庫等が多数組み込まれており、非常に複雑な構造になっている。

入り組んだ構造と、膨大な書籍の詳細を正しく理解しているのは司書である本子のみである。

本子はその音を聞いたのは、二階の点検に階段を上がってちようどであった。周囲を本で埋め尽くした広大な空間の、静寂の中に伝わる僅かな音。

一定のリズムを打つ、その音は、

・・・寝息？

点検を済ませながら、ゆっくりと音に近付いていく。

やがて、本棚に囲まれた、開けたスペースに出た。

長机が列を作るこのスペースは、生徒達が主に自習場所として使っている、読書場である。

音の発生源は、一番奥まった机の隅で、腕を枕にして丸まっていた。

「ムニャ・・・スピー・・・ZZZZ」

寝息を立てている男子生徒は、本子も良く知る、比較的多く図書館を利用している生徒だった。

と言つても、やっている事といえは昼寝か会話かの2パターン程で、

あまりに騒がしい時は、図書館から追い払う事もよくある。

「猫見君、起きなさい、消灯です」

「フニャ……、……スプー……」

呼んでも、軽く揺すつても、帰ってくるのは寝息。

迅速な仕事運びを尊ぶ本子には、年齢に不相応な可愛らしい寝顔も、どこか憎らしく見えてしまう。

……仕方無い。

こうなれば、少々遺憾ではあるが、力技で目覚めさせるほかない。

本子は、己の眼鏡を、くい、と押し上げると、手提げ鞆からある物を取り出した。

頭の中では、少年の保護者の数学教師の、日頃の少年に対する所業をイメージする。

一度、大きく溜め息を吐くと、おもむろ徐に、それを振り上げた。

「えいつ」

「ほぎやっ!!」

目覚めた光姫が目にしたのは、本子の姿と、己の頭に落とされた凶器、

「にや・・・、本子ちゃん？ソレなにコージエン？」

黒い革のカバーで覆われた巨大な書物。

「いえ、メモ帳です」

「メモ帳?!ソレが!?!」

驚くのも無理は無いだろう、と本子は判断する。

一般的な感覚によれば、己の手に持つ物体は、かなりの大きさなのだから。

几帳面な性格の本子は、一日の予定や出来事、書籍の情報等を全て記録する。

だが、圧倒的な文字数で、市販のメモ帳では書き留めきれず、その対策として数年前に作成したのが、

A4用紙2千枚を繋ぎ合わせたメモ帳で、他からは ブックワーム 字喰い虫 と呼ばれる代物であつた。

現在、本子の手にあるのは9冊目である。

「まもなく消灯です。速やかに退館してください」

「うん分かつたよ。あつ、今何時？」

「・・・18時、40分を過ぎています」

質問して、光姫は思い出した。外道の帰りを待つために図書館に居たのだと。

「いっつけね、ゲドちゃん待ってたんだつた!またね本子ちゃん!」

慌ただしく光姫は走り去って行った。

その背を見届けて、点検を再開した本子は、さっきまで光姫の座っていた椅子の隣に、大量の絵本が積まれているのを発見して、静かに溜め息を吐いた。

「もう帰っちゃったかなー」

外道を探して光姫は校舎を駆けていた。

光姫が外道を探す理由は、取り立てて大した事は無く、‘今日は一緒に帰りたいたい気分だった’という物で、外道から言わせれば、*“傍迷惑な気まぐれ”*の一つである。

校舎は、沈んでいく夕陽に照らされ、内外共に徐々に薄暗い陰に侵食されてきている。

職員室へと足を運んでいた光姫は、廊下の向かいに見知った教師二人を捉えた。

「おつすウギちゃん元気してるー？イガちゃん夕陽が眩しいぜ！」

「おう、元気だよ。君は今日も、元気いっぱいだねえ。にひっ」

「おい猫見、人の頭見ながら眩しいとか言うもんじゃねえな。転がすぞー？」

それは、一升瓶片手の雨切と、夕陽を禿頭で反射する五十嵐であった。

とても教師に対する物とは思えないフランクな挨拶に、

五十嵐は青筋を立てた半笑いで、雨切はほろ酔いの笑みで応じる。

「えへへ、あつそうそう、二人ともゲドちゃん見てない？」

「外道か？ 昼間に会ったきりだが・・・、おっさん知らねえか？」

「あく、さつき書類渡しに行ったら鞆持ってたし、もう校内には居ないかもねえ」

「そつかサンキュ！ じゃあ僕ゲドちゃん追っかけてくるから。バイバーイ！」

「帰り道には気い付けなよ〜」

光姫は踵を返すと校舎から飛び出して行った。



・・・本当に騒がしい奴だよ。

走り去る問題視の背を見ながら、我統は思う。

高校生に対する表現としてどうかとは思うが、手が掛かるガキを見ているような感がある。

・・・もしかすると、外道も同じ事を感じているかもな。

外道は、猫見に冷たい態度を取ってはいいるが、あれは本気で嫌っては無いように見えるし、外道には怒るので指摘しないが、マイナスとプラスでプラスでプラマイゼロないし、やや

プラス寄りで釣り合いが取れている。

「あいつ・・・、バイクの外道にどうやって追い付こうってんだ・・・」  
「元氣だねえ」

雨切は暢気に笑っているが、元氣だからで片付く話ではない。

だが、と五十嵐は内で否定をする。

入学してからずっと問題視されている行動力だ。今更な問題提起など、捨て置くに限る。

故に、本来の話題に軸を切り替える。

「で、今日は何処で飲むんだっけか」

「ほら、駅前の『豪穴』だよ。あそこ、旨いんだよねえ」

今日は教員の親睦にと校長が提案した飲み会。幹事は雨切と五十嵐だ。

「来る奴等は・・・、二年陣少ねえなあオイ」

手元の参加者名簿に目を通した五十嵐は、鴉マスクを指で打ちながら吐き捨てる。

二年陣の教師の、特に担任教師の名がごっそりと欠けている。

外道忠信Ⅱ断つた。まあ、日頃からコミュニケーション取ろうとしないから想定内

海越電子Ⅱ不在。昼間の騒動で一時入院となった

雪平良虎Ⅱ不在。食中毒で運ばれたらしい



白瀧 薫Ⅱ保留。海越と雪平の見舞いに行った。時間があれば来るかも

・・・デイスコミュ男は例外だが、これはあんまりだろ・・。

「雲野さんは来るって言ってたな。天城の奴はタダ酒なら行くとかほざいてやがった。他は誰が来る？」

「木原のじいさんを誘つといたよ。鏡くんも誘つたんだけど、興味無いって、勿体無いねえ」

「酒や料理に興味がある女には見えんだろ。校長は何してんだ？」

「今度配る書類の原稿書いてから来るってさ」



「あ・・・?はあ、おいおい・・。」

市内の繁華街で信号待ちをしていた外道は、自身の乗る単車「スコール」が突然、活動を停止させた事を訝る。気味の悪い音を上げ、油煙を吐き出したバイクは急速にエンジン音を失った。

ライトも消え、ハンドルを回しても反応は無い。

外道は大きく舌を打つと仕方無くバイクを路肩に引っ張った。

・ ・ ・ コイツもか。

何故かは分からないが、外道は己の所有物を壊しやすい。乱暴に扱った末の結果ならまだ分かる。

しかし、何もせずとも大破・故障等が週一で起こっている現状は、呪われていると言ってもいい。

こうなると、面倒だがバイクを押しして帰るほか無い。

修理に出せば直るだろうが、少なくとも明日は、自宅から学院までの近くない距離を徒歩で通勤しなければならぬ。行き場の無い苛立ちを紛らすため、単車のマフラーに蹴りをいれた外道は、小さく溜め息を零すと、停めた単車に腰掛け街を眺めた。

既に陽の沈んだ空は、一面を藍に染め、半刻としない内に下ろされる夜の帳に負けまいと、歓楽街は眩いネオンの装飾を施し始める。

府熊の町並は、年を経るにつれ近代的な物へと変わってはいるが、

全体としては、地元の自然を切り崩す事無く生きてきた、変わらない風景でもある。

唯一、大きく変わった物と言え、三十年前には市の中心部に、当時の観光名所であった高層のタワーが在ったが――

そこまで考えて、外道は思考を打ち切った。

つい先程から、己に対して複数の視線が注がれている。

敵つい單車を停めている自身への好奇の物かと思つていたが、一定の距離から離れず、且つ、近付いて来る事も無い。それに加え、この感情は――

・・・釣り上げるか・・・。

視線の主が接触してこないなら、向こうから来やすい状況を作れば良い。

外道はバイクの鍵を抜き、付近の路地に歩を進めた。

路地の突き当たりは四方を壁に囲まれており、ゴミ捨て場も兼ねた小さな広場となつている。

外道が足を止め、煙草に火を点けていると、案の定、複数人の気配が近付いて来た。

広場に入つて来たのは四人組の男達。

平均以上の身長と体付き、パーカーのフードで顔は良く見えない。

場の雰囲気は、広場を覆う陰気と、男達が持つ得物が地を擦る雑音が合わさり、

長閑に世間話をしに来た、という可能性を潰している。

憎しみを多分に含んだ視線を一身に受けた外道は、

ある種、自身に取つて最も馴染み深い境地に身を浸した事で口元を歪める。

男達は、ゆつくりと、外道を囲うように広がる。

そして、その中から赤いパーカーを着た男が歩み出た。

「・・・よう、探したぜ・・・」

言うところ赤パーカーは二の句を継ぎながら自身のフードを外した。

「ゲドー……!」

「お前は……」

憤怒の形相の赤パーカーの顔に、外道は、

「……だれだ……?」

見覚えが無かった。

## 淀む瞳の教員 4

●  
・・・許せねえ・・・!!

●  
青年は憤慨していた。その身を、憎悪と憤怒で焦がしていた。

負の感情の矛先は、目前で綽しゃくと煙草を吹かす男、外道忠信に向けられていた。

・・・コイツだけは・・・!

●  
青年は、私立高校「府熊殿学院」の生徒であった。

彼はその青春の殆どを、部活動、野球につき込んでいた。

学院に進学した理由は、県内の強豪校だったからである。

青年の不運の始まりは二学年の末の事。

部活の間に走り込みをしていた彼は、突然に膝の痛みを訴え、医者診察を受けた。青年は、膝に爆弾を抱えていた。言い渡されたのは長期間のリハビリ。

それでも、完治の見込みはあった。故に青年は、三年の夏には間に合わせると心に決めた。

だが、野球が好き青年に取って、長期間野球に触れられない事実は、彼の心に暗い影を落としていた。

ある時、煙草を吸おうと誘いを受けた。

青年に話を持ちかけたのは、彼と同じ野球部のメンバー数人。

しかし、彼らは野球部の中では不真面目であり、あまり青年と接点は無かった。

本来ならば、青年は野球に真摯であり、己から健康を害する物に手を出そうとは思わなかっただろう。

しかし、長期のリハビリにより鬱積していた苛立ち、焦り、ストレスは、容易く青年の思考を泥沼に引き込んだ。

魔が差してしまった。後に思えば、この時点で不運の連鎖は始まっていたのだろう。

『……ん……？何だお前ら』

誘われるままに訪れたプール裏で青年は、

『……気に入らねえな、おい』

悪鬼と遭遇した。

『這いつくばれ』

それは、前触れ無く降りかかった理不尽な災厄。

悪鬼は、誰一人として逃がさず、その暴虐で瞬く間に青年達を打ち据えた。その中で青年の膝に蹴りが直撃した。

『お前らはこの場所であつかり転んだ、そうだな？』

膝の激痛に苦悶の声を上げる青年を踏み付けて、悪鬼はのたまった。

人でなし、そう青年は思った。

顔色すら変えず自分達を痛め付けた存在を、どうして、教師と呼べるか。

痛みに苦しみながらも、青年は悪鬼への抵抗心を捨てずにいた。

こんなくそつたれに屈してたまるか、と。

この場を切り抜けければ、この悪鬼も教師として終わりだ、と。

そして、その怒りは、希望は、次の瞬間に淡く散る。

『俺の目を見ろ』

その瞳を見た瞬間、青年は心臓を掴まれたかのような錯覚に陥った。

否、真の意味で、命を掌握されたのだ。

ただ、目を合わせただけで、黒い、光を映さない瞳が、青年達の心を縛り付けた。恐怖に心を縛られてなお、目を閉じることが出来ない。

もはや青年達には、目の前の存在が人間とは思えなかった。

この場に来てはいけなかったのだ

その日、その場に居合わせた青年は、内に闇を植え付けられた。

あの後、どうやって家に帰ったかも覚えていない。

ただ、青年は漠然と、自身の終わりを感じていた。

後日、青年の膝は、二度と治らないと診断された。



●  
気力を失い、学校にも姿を見せなくなった青年は、唯一つ、復讐心のみを心に留めていた。

己を不幸の底へと叩き落した悪鬼、外道忠信への復讐である。



思いの外、機会は早くに訪れた。青年は、街中に一人佇む外道を見つけた。

そこからの行動は速く、直ぐに、あの日のメンバーを集めると、外道の入っていった路地に踏み込んだ。

だが、

・・・覚えてねえ、だと・・・!?

青年の顔を見て、外道は長い時間を掛けて一言、誰だ、と。

外道が青年達を痛め付けたあの日から、未だ一週と時間を経えていない。

しかし、外道がこちらに向ける顔は、見知らぬ人間に対する物だ。

・・・ああ、そうかよ。もう許さねえ・・・!

青年は確信を得た。悪鬼は牙を向けた者の事など気にも留めていない。

その事実が、一層、青年に怒りを滾らせる。

二つ指で煙草を転がす外道の表情は、前髪と眼鏡で隠れて見えない。

外道は、青年達を一瞥すると、小さく頷いた。

「ああ、確かお前ら、学院の野球部だろ。どつかで見た顔だと思ったら」

誰のものとも分からない、拳を握り締める音が聞こえた。

続けて、

「で・・・?何か用か?」

煙草を銜えて問うた。

外道の発言と、青年の内では何か切れたのは、ほぼ同時だった。

「つつ、死ねやああ!!」

青年は怒りのままに金属バットを振り上げた。

金属音が広場に反響した。



スタンドの照明で、小さく照らされる部屋がある。

府熊殿学院の職員室、その奥にある、壁に仕切られた一室。

校長室である。

ガラス棚に入っている表彰状とトロフィーから、創立から築いてきた歴史の一端が見える。

棚の横の壁掛けには、墨の達筆で、楽あれば苦あり、と書いてある。

部屋の主、明石笑平は筆を走らせていた。内容はPTAの懇談会の通知である。

今日は、笑平自身が教師陣に提案した飲み会がある為、遅れないようにと筆の進みは

速い。

しばらくして、通知を書き終えた笑平は、一段落として、息抜きに己の椅子を回した。二回、三回と回転する椅子に背を預け、やふー、と子供のような声を出す。

校長という職にありながら、笑平が生徒に好かれている理由には、大人には見えない無邪気な一面も持っているという物がある。

神出鬼没である点を除けば、その行動原理は好奇心と遊び心で大部分が占められており、他の職員と比較して、親しみを持ちやすい事が大きい。

自然に椅子が止まった後、笑平は向きを正すと再び仕事に戻る。

残る仕事は、己に届いた書類に目を通す作業だけだ。

手元の書類の束を捲っていた笑平の手は、ある一枚で止まる。

退学願。そう書かれたプリントは、先日、生徒の一人が提出してきた物だ。

己の生徒が、自主的に退学を申し出た事は、笑平に取って受け入れ難い事実であり、この数日間、書類に判を押すべきか、笑平を大きく悩ませている。

・・・やはり、外道君でしょうか・・・。

そして、その事に深く関係しているであろう教師、外道忠信。

外道については、生徒からかなりの陳情書類が上がつて来ている。

その暴力的、若しくは、排他的な言動は、当然ながら悩みの種である。

しかし、笑平はそれ以上に、外道の事を心配していた。

かつて、己の生徒として学院に在籍し、周囲の誰にも心を許さなかった青年、外道。当時の笑平に、その心の壁を取り払う事は出来ず、結局、外道は行方を暗ました。

生徒の心を救えなかった事に、笑平は酷く心を痛めた。

そうして数年前、行方の知れなかった外道が、教師として戻ってきた事には、大きな安堵と喜びを得たものだ。しかし、

『もう、あんたの生徒じゃない』

戻ってきた外道は、依然として心に壁を作っていた。

15年の経った今でも、外道は他者を受け入れようとしていない。

『毎日問題持ち込んで来るんで叩いてばっかりですよ』

否、と笑平は考え直す。

間違い無く、外道は変わってきている。

・・・きつと、彼から良い影響を受けていますね。

『あ、聞いてよアカッシー！こないだゲドちゃんかねー』

笑平の脳裏に映されるのは、外道と対極の精神を有する、太陽のような少年、猫見光姫。

少年の眩い輝きが、外道に良い影響を与えているのではないか。

師の立場に立つ者として、光姫と外道の相互の成長を見守りたいと思う。「やは、大いに結構。．．．しかし」

府熊は寛容で陽気な土地と言われているが、あくまで寛容であるだけだ。陰の気を振り撒く外道が、敵を作るのは時間の問題である。

．．．そういえば、野球部の彼、家に帰っていないと報告が来てますね。

「．．．大丈夫でしょうか」

窓の向こう、小さく見えている街のネオンは、宵闇とのせめ闘ぎ合いを繰り広げていた。



「．．．．．かはっ．．．！」

肺から空気が吐き出される。

その身を襲った衝撃に耐え切れず、底冷えした夜の地面に身体はくずお頽れる。

「．．．クソ、野郎が．．．！」

怒りを込めた言葉は掠れていて、しかし、はつきりと広場に響く。

「手前っ、いつの間に、そんな物を！」

地に伏した青年は、状況に理解が及ばず、変わらず煙草を吹かす外道に疑問をぶつけ

る。

青年が金属バットを叩き付けた瞬間に、外道は動いていた。

半身を僅かに捻る動作で、青年の胴に目掛けて右腕を中段に振り抜いたのだ。

青年の腹部を穿った凶器、

錆びた鉄パイプは、薄ぼんやりとした街灯の光を映している。

「何の備えも無しに、唯煙草吸つてると思つてたのか？馬鹿が・」

無表情で青年を見下ろし、嘲るように吐き捨てた外道は、鉄パイプで固い地面を打つ。

そこで、場の空気が、未だ凍り付いた儘である事を確認し、即座に次の行動に移った。

倒れた青年の向こう、突然の凶行に対応が遅れた三人の男達、その内の最も距離の近

い一人の顔に、深く鉄パイプを突き込む。骨の碎ける音と共にくぐもった悲鳴を上げ

て、男は仰向けに転がった。

汚えな、と外道は、鉄パイプに散った鼻血を拭う。

そこで、漸く硬直の取れた残りの二人は、半ば恐慌気味に外道に襲い掛かった。

二人は、視線で示し合わせ、未だその場を動かこうとしない外道の前後に展開する。

彼等が選んだ方策は、現状で二人の取れる最善、正面と死角からの攻撃で確実に仕留

める。

挟撃の策だ。

「うおおおらあつ!!」

外道の前方に陣取った男は、どら声を張り上げ、外道の額目がけて全力で得物を振る。唯我武者羅に、殺すつもりで武器を振り下ろす。

この一撃が、防がれようが外れようが構わない。

攻撃の本命は、前方の男の突撃に続く、死角を取った男の外道の後頭部への一撃である。

外道が、二人の動きに対し、何の予備動作にも入らないのを見た時点で、二人は勝利を確信した。

しかし、外道が滑稽だとも言うように、口元を嘲りで歪めたのを、前方の男は目撃した。

「くだらんな、おい」

瞬時、前方の男の足を薙ぐ動作で鉄パイプを打ち込んだ外道は、痛みに身体を折った男の顔面に膝蹴りを見舞った。

更に、背後から振り下ろされたバットを半身で避け、軽く男の足を払う。

そして、重心を崩しよるめいた男の頭を鷲掴みにすると、広場の壁に大きく叩き付けた。

「お粗末」

外道忠信に取って、鬪いに不可欠な物は、確りとした下準備と敵に対する殺意。敵の戦力を見誤り、且つ、敵を前にして油断を生じる愚行を晒した青年達に、勝利を手にする事など出来るはずが無かったのだ。

○

場に一応の決着がついたと外道は判断した。

外道が路地へ入ってから凡そ八分程およが経った今、広場は死屍累々の様相を呈していた。

「……あ、思い出した。」

外道は、己の脇に転がる邪魔な男を蹴飛ばし、未だ意識を保っている赤パーカーの青年に近付いた。

「お前ら、プール裏で煙草吸おうとした奴か。その時の恨みか、なあ」

「……ぐつ、手前さえ居なけりや、俺は、俺は……！」



倒れ伏して尚、青年は射殺さんばかりに外道を睨み付ける。

殺意の視線を意に介さない外道は、その眼鏡の奥で注視する物があつた、  
・・・いい色だ・・・。

青年の瞳である。

迷いが無く、しかし、過去に宿していた輝きを殺した青年の瞳は、外道の評価に値するものだった。

「手前だけは、絶対に、生かしちゃおけねえ！」

殺意や憎悪の感情など慣れたものだ。だが、コレはいただけない。

殺意を行動に移してしまったのなら、そこで終わりだ。

青年はもう、抜け出せない沼の中に飛び込んでしまったのだ。

○

呪詛を吐き続ける青年が気付いた時には、外道が得物を振りかぶっていた。

「・・・もういい」

「何つつつ?! つぎこ!!」

青年にあの目を思い出させるように、凶器は膝頭を強く打った。

あの日以上の痛みにもがく青年の体は、続く外道の踏み付けにより地に縫い付けられた。

「禍根は断たねえとな．．．」

「な、ぐつ、何しやがる、放せつ！」

外道は、ゆつくりと、凶器を振り翳す。

傍目はためから見ても理解できる。鉄パイプは狂い無く、青年の頭部に打ち込まれるだろう。

「や、やめろつ、やめろよ、おいっ！」

「さよならだ．．諦めろ」

その時、青年は外道とまつすぐ視線ががち合った。

．．．そういう事かよ、畜生．．．

青年は思い違いをしていた。

他者を虐げしいた、罵り、その不幸をせせら笑う。それが外道忠信であるのだと。

だが、違った。この男は、悪逆非道の性さえも、隠れ蓑にしていたのだ。

この人間崩れは、最初から青年の事など見ていなかった。

他者を瞳に映していなかったのだ。

「野垂れ死ね．．」

「やめろおおお!!」

凶器が弧を描いた。

○

「——い。お——い、ゲドちゃん。ドコだ——？」

●

外道は振り下ろそうとした手を止めた。

聞き間違いだろうか。何故か己の良く知る問題児の声が聞こえたのだ。

学校からも家からも遠い、この街の路地の中に。

あの問題児に関わり過ぎて耳まで冒されてしまったのかも知れない。さっきのは幻聴で間違い無い。

「ゲドちゃん、ドコにいんの？？お——い」

・・・何故ここに居るんだ馬鹿野郎・・・。

流石に二回目の否定は苦しい。アイツの声だ。距離的に、すぐ近くに居る事が分か

る。

己の場所まで来られるのも不味いと判断した外道は、野球部の四人が気絶している事を確認して広場を出た。

路地から出ると、直ぐに光姫と鉢合わせした。

「おつ、ゲドちゃん居た居た。ここで何してんの？」

「煙草吸ってたんだよ。お前こそ、何でこんな所に居る」

外道は言外に邪魔だと示唆するが問題児は気付いてない。

「そうそう図書館でゲドちゃん待ってたなら寝ちゃってさ。ゲドちゃんもう帰ったって聞いて、で、コッチの方にいないかなーって探してたらゲドちゃんのバイク停めてあんの見つけたんだ」

普通、バイクで帰った人間を追っかける馬鹿は居ないと外道は思うが、

内心で、コイツ馬鹿だったわ、と再確認し自己解決した。

「・・・何で待ってたんだ」

「ん？一緒に帰ろうかなって思ってたさ、えへへ、ってアイタツ！何だよ」

・・・デコピンで抑えた俺は頑張った。今回は明らかにコイツの所為だろ。

傍迷惑な気まぐれに付き合わされる身にもなってほしい。馬鹿はタイミングも悪いから最悪だ。

しかも、殆ど感覚に任せて己の場所に辿り着いたあたり本当に性質たちが悪い。屈託の無い笑みの問題児を無視してバイクに乗り込もうとした外道だが、

路地に入る前に故障していた事を思い出した。

外道としては、これ以上路地の近くで時間を食うと、

面倒めんどうな事になる予感がしているので早く帰りたいのだが、

・・・あまり、やりたかないが・・・。

考えた末、一つだけ解決法が思い付いた。

外道が選びたくない苦肉の策であるが、四の五の言つていられない。

外道は己に背後から話し続けている光姫に向き直る。

「・・・おい、バイクに乗れ。連れてってやる」

「えっマジで!? 珍しく優しいね、ゲドちゃん!」

「それとお前、来月は小遣い抜きだ」

「え?! 何その唐突なアメとムチ! ねえ何で!？」

「いいから早く乗れ、おら」

騒ぐ馬鹿を、'スコール'の後部座席に放り投げる。

鉄パイプを席の横に掛けると、バイクに鍵を差し回す。

・・・やっぱりか。

驚く程簡単に、バイクは息を吹き返した。

喜ぶべき事だが、外道は忌ま忌ま<sup>い</sup>しげに舌を打った。

この状況でバイクが復活する理由など一つしかない。

外道は後部座席の問題児に呆れを含んだ視線を向ける。

猫見光姫は天に愛されている。端的に言えば豪運である。

とにかく運が良い、言葉にしてしまえばその程度だが、傍から見れば異常なのだ。

運気の絡むものなら凄まじい当たりを披露し、不幸な事態にも陥らない。

過去に数学の授業で、外道が100%選択問題のテストを出した際、10割の得点率を叩き出し、それ以降テストで1問も選択問題が出る事は無かった。

日頃、不運に悩まされる外道にとって、対極とも言える運気の塊である光姫には妬みに近い苛立ちが僅かにあるのだ。今も、急ぎでなければその運に<sup>すが</sup>縋る真似はしたくなかった。

「出すぞ」

「あれ、ゲドちゃんヘルメット被らなくていいの?」

「捕まらなけりや問題無い」

捕まらなければ罰せられる事は無い。

「悪い事すると正義の味方が来ちゃうぜ?」

「んな軽犯罪にまで出張<sup>で</sup>つてたらヒーローは過労死するだろうな」

・・・それに正義の味方は今ごろ、別件で飛んでる筈だ。

●  
四名の青年達が倒れ伏す、歓楽街の夜の路地。

その場に僅かに射し込む天の月光を裂いて一人の巨漢が降り立った。

「ぬうううるああ!!現場はここか?」

巨漢は場を見回す。

「ぬう、まさか傷害事件とはな・・・。犯人は・・・取り逃がしたか。

平穏をみだりに崩す者、許しはせんぞ・・・!つと、今は彼らを助けてやらねばな」

巨漢が動き出して同時、四人の内の一人が目を覚ました。

「・・・ひいつ!な、何だお前!」

「案ずる事は無い青年よ、吾輩が今から近場の病院へと運んであげよう」

巨漢は青年達をまとめて脇に抱えると、膝を曲げて屈んだ。

「お、おい!あんた、一体何を」

「I can fly!ぬうるあああああ」

「うわあああああああ——」

○

その時間帯、多くの市民が空を飛ぶ巨漢の影を目撃したが、特に気にする者は居なかった。

●

景色が流れゆく。

市街の大通りを「スクール」で走り抜けながら、外道は後ろへ流れるネオンを見ていた。

府熊市は、陽気の性を持つ。その活気は日常のあらゆる場で見られ、歓楽街はそれが特に目立つ。

昼夜問わず賑わいを見せる町並は、良く言えば活発、悪く言えば落ち着きが無い。

すれ違う通行人や車両の何人かは、ヘルメット無しで走行する二人をぎよつとした顔で二度見するが、それが外道と光姫なのが分かると、納得したのか直ぐに平常に戻った。

あの反応は慣れか馴染みのどちらだろうか、と外道は考える。



少なくとも、顔を覚えられる程度には受け入れられているのだろう。

この街に来た当初など、コミュニケーション能力の絶望的な自身に周囲は対応に困っていたのだ。

「えへへ」

外道の後ろで鞆を抱えている光姫は、何故か照れたように笑っている。

両手で鞆を持っているのは、以前に後ろに乗った時、空いた両手で外道の脇腹に抱き付き、

うぜえ、と蹴り落とされた経験から学んでの事だ。

「・・・おい、何が可笑しい」

うっとおしい、と外道は眉根に皺を寄せ問う。

「え？うーん、楽しいから！」

「何がだ・・・」

詳細の催促に光姫は顎に手を当て唸る。

「んとな、・・・全部！」

何が楽しいと聞かれて全部と返すのは具体性の欠片も無い。

光姫とは長い付き合い故に、語彙力が貧弱なのは知っている。

料理を食せば美味しいと叫び、遊びに走れば楽しいと笑う。

読書感想文を書かせれば10行で完成する程だ。

むしろ、今まで複雑な表現をした所など見たことが無い。

単純な思考回路だと苦勞もしないだろう、と別段羨む事も無く外道は断ずる。

そこで、ふと疑問が湧いた。

・・・コイツは何か変わったか？

外道と光姫が出逢つて五年と少し、果たして、光姫に変化はあつたのか。

・・・変わらんよな・・・。

ミラーを流し見れば、映るのは何の淀みも無い笑顔。

「え〜と、今日は、怒雷門見て、マコちゃんやナナちゃんやギンちゃんと話して、

あつカオリちゃんからカツオ煎餅もらったんだつた。あと―」

楽しそうに指を折つて今日の報告をする光姫を見て、外道は苛立ちを覚えた。

何故、と心の内に問うても答えは無い。

その眩まぼゆさが、無邪気さが、どうしようもなく外道の心に波を立てた。

「お前は何でも楽しく感じるんだな。・・・幸せな奴だ」

「えへへ・・・」

「褒めてねえよ」

皮肉も通じない、強敵だ。何があつても楽しい楽しいと、本当に子供のようだと思う。

年齢は16、とてもじゃないが年に見合った精神を持つているとも言ひ難い。しかも馬鹿だ。

大人になれない、だが、子供でもない。苦勞を知つていて、しかし、苦勞を感じない。馬鹿げた精神構造だと思ふ。そんな、理解不能の輝きを認める訳にはいかない。

「楽しいよ。ゲドちゃんのお陰でもあんだぜ？」

「・・・あん？何だそりゃ」

唐突に、光姫は感謝の言葉を紡ぐ。言葉は、更に笑顔で続く。

「だって、ゲドちゃんが居て、マコちゃんやナナちゃん、皆が居て、毎日が楽しくない訳無いよ」

外道は、これ以上光姫に喋らせたくなかつた。だが、制止の行動に体が動かない。

一つ一つの言葉の輝きが、己の性と対極の色が、外道を苦しめる毒として降り注ぐ。一度、照れ臭そうに間を置いて、光姫は口を開く。今日見せる一番の笑顔を乗せて。

「僕は、幸せだよ」

・・・ああ、最初から理解していた事だ。

出逢つたその時から、相容れない事など分かつていた。それでも、共に生きる道を選

んだのだ。

「……………光姫」

「ん？どつたの？」

外道が光姫に向ける感情は複雑で、外道でさえも正しく把握してはいない。

「これだけは言っておく」

「なになに、なにさ？」

だが、それでも外道は、己が己である為に、自身の感情に一先ずの結論を下した。

「俺は、お前が……………気に入らない」

「ええっ!?何で!?何かさっきまでイイ感じの雰囲気だったじゃんか!僕なんかした!」

「やかましい、ほら、ここまでだ、さっさと降りろ」

何時の間にかバイクは繁華街を抜け、二人のそれぞれの家に分かれる住宅街の小道で

停まっていた。

「えー、ここまで来たら最後まで乗せてってくれても」

「振り落とされたいか？」

肘で突かれ、戦戦恐恐としながら光姫はバイクを降りる。

「ま、いつか。走って帰ろつと。ゲドちゃんまた明日ね」

足を数回伸ばし、その場で何度か跳ねると、光姫は一気に駆け出して行った。

光姫の背を見送った外道は、紫煙をゆっくりと吐き出し、煙草を溝に放り捨てる。次の一本へと手を伸ばすが、箱は空になっていた。

「・・・ふう」

帰つて来て早々に、予備の煙草に火を点けた外道は、リビングに座り込む。首を回せば小気味良く骨が鳴る。感覚的に今日は災難続きだった気もする。馬鹿はやかましいし、金髪女装は目障りだし、白髪ジジイは自重しねえし、

・・・そんなに昨日と変わらねえな。日常、か？

そこまで考えて、外道は拳を机に叩き付けた。

今、自分は嫌いな奴等を日常に組み込もうとしていた。

どうも、馬鹿の所為で日常感覚が狂っているのかも知れない。

明日、拳骨だな、と呟きながら外道は紫煙を吹かした。

・・・そう言えば、野球部の奴等は何だったんだ。訳が分からん。

分からない事を考えても仕方が無い。外道は冷蔵庫を開けた。

中には相も変わらずコンビニ弁当。覚えてる限りここ数日は朝晩とも弁当しか食

べていない。

「……んな事ならハゲに誘われた飲み会行くんだった。……いや無理か。

人と話す事なんて何も無い。何より、外道は校長に会いたくなかった。

外道は、冷えた青椒肉絲をもそもそと咀嚼そじやくしながら鞆から取り出したプリントを広げる。

プリントは今日の授業でやった小テスト。今からするのはその採点だ。

暫く採点を続け、2—B生徒の束に取り掛かる。

「……正生は満点、と。次は……」

プリントを捲ると、次は猫見光姫と書かれており、外道は反射的に顔を顰しかめた。

「はあ……、さて……ん？コイツは……」

プリントは予想外に記述がされており外道は眉を上げた。問題は全て埋められている。

全問正解—であるなら仰天しただろうが、全ての問題が解法どころか計算も間違えている。

「適当にやってんじゃねえよ、つたく」

また、明日も拳骨だな、これは。まあ、今日よりは軽くしといてやろう。

外道は、何時の間にか上がっていた口角を元に戻し、テレビの電源を入れる。

「……ん？」

電源が入らない。リモコンを確かめるが電池は入れ換えたばかりだ。

本体の電源スイッチを押すが、これも反応せず。コンセントも抜けていない。

「壊れてやがる……」

またか、と外道は目を覆った。何故、俺の所有物は壊れやすいんだ、と。

前の代のテレビは、見ている最中に液晶が真っ二つに割れて再起不能となった。

府熊に戻って来てから一年と持った電化製品があっただろうか。

また買い換えか、と考え始めた外道は内でストップを掛けた。

……つくづく、タイミングの悪いバカだ。

問題児の皺寄せで外道の財布は寒い状態なのだ。

……今日の俺はとことん、

「ついてないな」

く了く